

---

# SHUFFLE! ~ 帰って来た少年 ~

欠陥電気

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SHUFFLE！〜帰って来た少年〜

### 【Nコード】

N9557X

### 【作者名】

欠陥電気

### 【あらすじ】

島が三日月状の形をした島“初音島”

そして、一人の少年の物語が始まる・・・。

初作品初投稿なので駄文ですが、色々とアドバイスをくれると嬉しいです。

この小説は、SHUFFLEと、D・C・？のコラボ小説です。尚且、主人公が最強のオリ主です。そして、作者はSHUFFLEの原作をプレイしたことはありません。なので、キャラが違っていたり

しますがご了承下さい。(D・C・?はPS2版ならプレイして  
います)

最強等が嫌いな方、コラボ小説が嫌いな方はバックして頂いても構  
いません。それでも良いと言う方は、どうぞご覧下さい。

## プロローグ

島が三日月状の形をした島“初音島”

そこには、年中枯れない桜が存在した・・・

その桜は、枯れないと同時に願いを叶える桜の木でもあった・・・

そして、一人の魔法使いの女の子が居た・・・

その魔法使いはこう願った・・・

「ボクにも家族を下さい・・・。」

それと同時に、とある病室では少年が少女を救うために、ある一つの嘘をついた・・・

「お前の母親を殺したのは俺だ・・・。」

魔法使いの女の子は家族を手に入れ、少年はある出来事により姿を消した・・・

そこから物語の歯車が少しずつ動き出す・・・

## プロローグ（後書き）

アドバイス等あったらよろしくお願いします。

## 主人公設定（幼少期）（前書き）

今回は、主人公の設定を書きます。

## 主人公設定（幼少期）

名前：神崎 かんざき 光麻 ひろま

年齢：7歳

身長：義之と同じ位 体重37kg

性別：男

髪色：黒

見た目：若干女の子っぽい顔をしている。

性格：お人好しで、困っている人を放っておけない

魔力ランク：D（BB）

幼い頃は無意識に魔力を抑えている

目の色：両目とも黒

父親から剣術を習っており、剣の扱いはお手のものだそうだ

因みに、両親は結婚してもなお、ラブラブだそうだ（主人公談）

甘い食べ物が大好き。

イメージCV：高橋 美佳子

主人公設定（幼少期）（後書き）

厨二すぎる W W

すみません、主人公の名前を変にして。



第一話（少年編）（前書き）

幼い頃の主人公が初音島に引っ越してきます

## 第一話（少年編）

「パパ、今度はどこに引っ越すの？」

「今度はなく、お島が三日月の形をした大きな島に引っ越すんだよ」

「そうよ光ちゃん とても大きな島だから、友達もたくさん出来るかもね」

「うん！僕とても楽しみだよ」

あ、自己紹介が遅れたね。僕の名前は神崎 光麻。7歳！

お父さんとお母さんの仕事の都合で前に居た町から、初音島に引っ越す事になって、今は初音島に向かっている途中です

「今度の学校でも友達が出来たら良いな」

物語の歯車はまだ回らない・・・

第一話（少年編）（後書き）

何かgdgdになりそうな気がしてきた（・・・）

アドバイス等よろしくお願いします。

## 第二話（少年編）

パパやママとお話をしていると

「まもなく初音島に到着します。お忘れ物の無いよう気を付けてください。」

船にあるスピーカーから定番の台詞が聞こえました。

「おーやっ！と初音島に着くぞ。」

「光ちゃん、忘れ物の無いようにしといてね。」

「はーい 楽しみだなー」

～ 船着き場にて～

「おおー！ここが初音島かー！」

「驚くのは早いぞ光麻。この島には、一年中枯れない桜があったんだよ。」

「一年中！しかも枯れない桜って！スゴいね！まだあったりするの？」

「スゴいやー！一年中枯れない桜なんて！まだあるなら、早く見たいな～ そう思い、パパに聞いてみると」

「残念。何でも、桜はもう枯れちゃったみたいだぞ」  
「ええ〜！・・・観てみたかったのに。」

「まあ光ちゃん、それはしょうがない事だと思うわ。ずっと枯れずに咲く桜なんて物は、無いと思うわよ。」

「うう・・・そうだね。枯れずに咲いてるなんて、あり得ないもんね。お花だって、いつかは枯れちゃうもんね。」

「そうよ光ちゃん。」

「パパ、ママ。早くお家に行こうよ」

荷物持って疲れたよ。そう思っていると

「よし！じゃあ、これから住むお家に行こうか！」

「うん！」

第二話（少年編）（後書き）

誰か！誰か俺に文才を！．．．ああ、学校面倒だな

アドバイス等あったらよろしくお願いしますね。

第三話（少年編）（前書き）

最近、学校に行くのが楽しいと思うときがある・・・何故だろうか？

### 第三話（少年編）

しばらく町を歩いていると、閑静な住宅街に着きました。

「もうちよつとでお家に着くわよ。家に着いたら荷物を置いて、近所の方に挨拶に行きましょう。」

「そうだな。これからお世話になるかも知れないからな。」

「近所に同年代の子が居れば良いな」

住宅街を歩いていると、一軒の家が見えてきました。しかも・・・結構デカイ家です。

「ママ、此処が新しいお家？」

「そうよ。」

「へえ、かなりデカイね。」

どのくらいデカイかって言うのですね、普通の一軒家と違って、見上げる位の大きさと、横幅も、かなりありますね・・・一体いくらするんだろう・・・この家

「何か・・・前に住んだお家よりも、レベル上がってない？」

因みに前に住んだ家は、普通の一軒家でした。



「そうかしら？前に住んでた家と、そう変わって無いと思うけど。」

「そうだな。この家も安い方だったからな。さて、一旦家に入って荷物を置こう。」

・・・案の定、家の中も広がったです。一階だけでも、部屋がいっぱいあるし、縁側もあるし、二階もあるし・・・絶対この家の値段高いな・・・いくらするのか気になり、僕はパパに聞いてみた。

「パパ。この家いくらするの？」

「んー確か、一千万位の安い値段だったと思うぞ。」

「高！一千万って・・・」

しかもその値段を安いと言い張る時点で、金銭感覚おかしいんじゃないの？って言いたくなる。

くしばらくして〜

「荷物も置いた事だし、ご近所さんに挨拶してきましょう。」

「そうだな。なら、早く行くか 行くぞ光麻。」

「はーい 行こう行こう。」

第三話（少年編）（後書き）

俺に文才を下さい！

結構ggggになりそうな気がしてきた。

第四話（少年編）（前書き）

やばい・・・aggaggあかな？

## 第四話（少年編）

「まずはお隣に住んでいる人達に挨拶に行きましょうか」

「よし。そうと決まれば、早く行こうか。」

手土産（有名なイチゴタルト）を持って、隣の家に向かった。

隣の家の立て札を見ると、「芙蓉」という字が書いてあった・・・  
何だか、恐い人にあるような名字だね。

「よし。早速押してみるか。」

パパがそう言って、呼び鈴を押した。

ピンポンという最早聞き慣れた音を聞きながら僕は、どんな人が出てくるのかと、楽しみにしていました。

するとドアから、芙蓉さんのお母さんが出てきました。

「あら？どちら様でしょうか？」

「初めまして。今日からお隣の家に住むことになった神崎です。」  
「引越しの挨拶をしようと思い、隣に住んでいる芙蓉さんに挨拶をしに来ました。」

二人とも丁寧だな。僕がそう考えていると、芙蓉さんが

「まあまあ、引越しの挨拶ですか。でしたら、家が上がってって下さい。丁度今近所に住んでいる方達も居ますし、父と娘も居るので、是非御上がり下さい。」

それなら挨拶する手間も省けて一石二鳥じゃないか

「そうですね。でしたら、お言葉に甘えて上がらせて頂きますね。」

「いえいえ。さあ、どうぞ上がって下さい。」

「邪魔します。」

僕が元気良く言うと

「あらあら。元気の良い息子さんですね。」

「はい。自慢の息子です。」

「えへへ。」

何かそう言われると照れるな。”

「是非、娘とも仲良くしてください。」

「はい！もちろんです。」

仲良くしてくださいか。早くも友達出来ちゃうかな。楽しみだな。

リビングに着くと、芙蓉さんのお父さんと僕と同年位の女の子と、芙蓉さんとは別の両親と、これまた同年位の男の子が居た。

「何かあの女の子と男の子全然喋ってないな・・・照れ屋さんなのかな？」

僕はそう考えていた。

「（仲良くなれたら良いな・・・）」

あ、そう言えば手土産渡すの忘れてた。僕はそう思い、キッチンでお茶やお菓子の準備をしている芙蓉さんのお母さんの所へ行った。

「（何て呼んだら良いんだろ・・・おばさんって呼ぶには若すぎるし・・・妥当にお姉さんで良いよね？）あの～お姉さん」

そう呼ぶと、芙蓉さんのお母さんは嬉しそうにこっちに向いた。

「あら～お姉さんだなんて嬉しい事言ってくれるわね　どうかしたの？」

「あの、これ・・・お気に召すかどうかは分かりませんが、どうぞ。」

僕はそう言って、手土産（箱に入ったタルト）を渡した。

「あらあら　ご丁寧にもありがとうございます」

きちんと渡せて良かった～結構冷や汗かいた気がしたよ～

「中身は何かしらう．．．これはタルトじゃない　うふふ、私好きなのよねタルト」

「どうやら喜んでくれたようだ」

「早速このタルトを切って、皆で食べましょう　リビングで待ってね」

リビングの方へ向かうと、とても賑やかになっていた．．．相変わらず女の子は黙っていたけどね。

「おう光麻。こっちおいで。」

パパが手招きをして僕を呼んだ

「なぐにパパ？」

「光麻、自己紹介まだしてないだろ？」

「うん」

「なら、早く自己紹介をしなさい。皆楽しみにしてるからさ」

「あ．．．うん！えっと、僕の名前は神崎光麻です。嫌いな食べ物はないです。代わりに、好きな食べ物ならいっぱいあります　こんな感じで良いかな？」

「ええ、十分良かったわよ」

「ほ、光麻君は嫌いな食べ物がないのか。偉いな」

「ありがとうございます えへへ」

褒められるのはあんまり慣れてないから照れるな

「じゃあ私達も自己紹介しましょうか」

「そうだな、では私から。私の名前は土見隼人だ。で、そっちに居るのが」

「土見由紀と言います よろしくね」

何故だろう・・・二人とも若いですね。そう考えていると、男の子が

「僕の名前は土見稟です。これからよろしくね。」

そう言って手を前に出した・・・握手だね

「うん。こちらこそ、これからよろしくね」

僕はそう言って、握手をした。あとは・・・あの女の子とその両親だね。

「じゃあ今度は私達の番だね。私の名前は芙蓉幹夫です。今キツチンに居るのが芙蓉紅葉だよ。さ、楓も自己紹介しなさい。」

「う・・・」

女の子はそう言って俯いてしまいました・・・恥ずかしいのかな？

僕はそう思い、女の子の方へ行った。



「・・・っ!」

女の子は僕がこっちへ来て、びっくりしているようだ。

「ねえ」

「は、はい!」

相当恐がっているようだ・・・

「僕は君と友達になりたいな あ、もちろん稟君ともね」

「私と・・・友達に?」

「うん。君と友達になりたい。でも、友達になるためには自己紹介が必要だね だから、名前を覚えてくれないかな?」

僕がそう言くと、女の子の顔が笑顔になった

「!?!?・・・はい!私の名前は芙蓉楓です。」

「そうか楓ちゃんか じゃあ、今から僕と楓ちゃんは友達だね」

「ふふ、そうですね 今から、私と光麻君は友達ですね」

「違うよ楓ちゃん。」

「え?」

「稟君とも、僕とも友達だよ ね 稟君」

「う、うん。僕も楓ちゃんと友達になりたいな。」

「稟君・・・うん！私も稟君とも友達になりたいです。」

「よし、三人で握手をしよう。」

僕はそう言って、左手に稟君の手を、右手に楓ちゃんの手を握った。

「これからも、三人友達でいようね。」

「うん！」 「はい！」

三人の手は、きちんと握られていた・・・

第四話（少年編）（後書き）

急展開すぎるかな？文才を下さい。

感想等よろしくお願いしますね

ちなみに、稟君の両親の名前はオリジナルです

第五話（少年編）（前書き）

「都合主義」ですね・・・はい

## 第五話（少年編）

手を繋ぎ終わった後、僕はこう思っていた・・・

「（この繋がり壊したくない・・・これからどんな困難が待っているかも・・・絶対に守ってみせる！）」

そう固く決意をしていると、キッチンから楓ちゃんのお母さんが来た。

「お茶の準備が出来ましたよ」

時計を見てみると、現在午後2時。おやつには早い時間だが、まあ気にしないでおこう。

「お茶以外に、神崎さんが持ってきてくれたタルトもありますよ。折角ですし、皆で食べましょう」

「じゃあ、あなた お言葉に甘えて戴きましようか」

「そうだな では、戴くでしょうか」

「いただきます」

「あ〜ん・・・う〜ん美味しい 流石有名店のイチゴタルトだね」

「はい このタルト特有のサクサク感・・・それにイチゴの絶妙な甘さがとてもいいですね」

皆美味しそうにタルトを食べていました。すると、楓ちゃんが僕にタルトが刺さったフォークをこっちに向けて来ました。

「あの・・・光麻君・・・その、あ〜ん」

「あ、あ〜ん」パクリ

何か恥ずかしいな

「うん・・・美味しいよ楓ちゃん」

「そ、そうですね」

「あら 楓ったらやるわね」

「お、お母さん！」

「しかも、間接キスだなんて まだまだ若いのに大胆ね」

そこまで言われると、楓ちゃんは顔を真っ赤にしていた・・・僕も恥ずかしいんだけどね。しかも、お母さんとお父さんもニヤニヤしてこっちみてくるし・・・何か嫌だな。

しばらくすると時計が、3時位になるつとじていた。

「では、そろそろおいとまさせて頂きます。」

「もっとゆっくりしていけば良いのですよ?」

「いえいえ、他の人達にも挨拶をしなければならぬので・・・」

「そうですか?では、また今度いらして下さいな」

「はい では、お邪魔しました」

「お邪魔しました? 楓ちゃん、稟君また学校だね」

「はい」「おう」

二人の返事を聞いた後、僕達は芙蓉家から出た。友達が出来て良かったな?。

さて、次は誰の家に着くんだろう?僕は、とてもドキドキしていた。

第五話（少年編）（後書き）

さて・・・すいませんでした！楓のキャラを壊したなら謝ります。  
すいませんでした！

ああ・・・原作やらないとな



第六話（少年編）（前書き）

今回は日本語の使い方がおかしい&文が滅茶苦茶の可能性があるのでご了承ください

## 第六話（少年編）

楓ちゃんの家を出る頃には、時刻が午後3時30分を指していた・  
・早く挨拶を済ませないとね。

「（やっぱり近所つてなると、楓ちゃんの家を除いておばさんばかりなのかな？）」

僕の予想は当たり、歳を取った方が多かった。けど、皆優しそうで良かったな。

流石に時間帯的に、玄関での挨拶のみになった。僕達が挨拶をする  
と、笑顔で答えてくれたのでスゴく心地よかったです。

ふう〜。大体は挨拶はしたな〜

「よし、光麻。あと二軒くらい挨拶回りをしたら、家に帰って荷物の片付けをしようか。」

「はい」

次に見た家は、壁が白一色で、屋根が赤い色をした、なんともシンブルな家だった。

「じゃあ押すか。」  
ピンポン

この音いい加減聞き慣れたね。そんな風に考えていると、ドアが開き、老眼鏡？をかけたおじいさんが出てきた。

「ん？どちら様ですか？」

「この近くに引越して来た神崎です。今日は挨拶をしに来ました。」

「ほうほう挨拶とな。では、私達も挨拶をしないと。ちょっと待っててくれ。」

おじいさんはそう言って家の中に入っていった。

少し待っていると、おじいさんが二人の女の子を連れて戻って来た。

「すまないな。では改めて、私の名前は朝倉純一だ。ほれ、由夢と音姫も挨拶しなさい。」

『・・・・・・・・』

純一さんがそう言っても、二人は黙っていた。やっぱりいきなりだとそうなるのかな？だったら僕が先に挨拶しようっと。

「えっと、僕の名前は神崎光麻って言うんだ。よろしくね（ニコッ）」

『・・・／／／／』

あれ？二人とも何か顔が赤いな・・・風邪かな？そう思っていると  
おだんごヘアーの子が

「ゆめ

「え？」

「朝倉由夢

「へえ～由夢ちゃんか～可愛い名前だね。」

「えへへ～／／／／」

「むっ・・・おとめ

「え？」

「だから！朝倉音姫！」

「おとめちゃんも可愛い名前だね。」

「・・・／／／／」

素直に感想を言うと、音姫ちゃんは、また顔を赤くした・・・やっぱり風邪なのかな？

「あらあら 青春ね」

ママが何か言ってるけど、気にしないでおこづ。

「ああそうそう。私の名前は神崎由香って言うの。よろしくね」

「因みに俺の名前は神崎総司だ。よろしくな。」

こんな感じで朝倉家との挨拶は終わった。

「では、そろそろ失礼します。」

「うむ。いつでも遊びにおいで。」

「これから仲良くしようね 光麻お兄ちゃん」

「うん よろしくね。」

「それでは……」

「バイバイ 由夢ちゃん、音姫ちゃん」

「うん またね」

「……またね。」

由夢ちゃんは元気良く、音姫ちゃんは小さい手で手を振ってくれた。  
何かくすぐったいな。

く自宅にて

「ただいま」

「さあ、さっさと荷物を片付けるか。」

予め、必要最低限の家具は業者の人が置いてくれたため、実質そんなに時間はかからないと思う。

「とりあえず食器を棚に入れるか。」

「はい。」

その後は、作業を終えて、晩御飯を食べて、お風呂に入って、自分の部屋のベッドに横になったら睡魔が襲ってきたので、打ち勝てずに、眠ってしまった。

こんな感じで長い1日が終わった。皆と仲良くしなきゃね。

第六話（少年編）（後書き）

因みに、主人公はフラグを建てていますV（＾－＾）V

第七話（少年編）（前書き）

.....



## 第七話（少年編）

次の日、朝の5時に目が覚めた僕は、庭に竹刀を持って行った。

外に出てみると、やはり春の朝と言うだけに若干肌寒い。

「寒くても、鍛練はちゃんとしないとな・・・」

ちなみに、朝にやる鍛練は素振りを300回やることと、色々な剣技を試したりする事かな。

「さて、やるかな。」

今日は日曜日だし、長くやってても、あんまり問題は無いよね。

「よし・・・つぶ！・・・」

それから、僕は黙々と素振りをする。そして、辺りには、竹刀を振る音のみが流れていた・・・

「ふ！・・・ふう〜今日は素振りはこれくらいにするかな。」

ちなみに、今日はいつもの300回ではなく、400回素振りをしていった。

家の時計を覗いて見ると、時刻は朝の6時。素振りだけで1時間も

経ってしまった。母さんもそろそろ起きる頃だし、あと30分鍛練したら、今日の所は止めとこう。

さて、素振りはしたから、後は剣技でもやろうかな。

「でも、あんまりやり過ぎると、近所迷惑だからな。・・・簡単な剣技にしとくか。」

しかも此処は自分の家の庭だからな。あんまりやり過ぎて、後で大変な事にならないようにしないとイケないから、結構大変である。

「今日は誰かに、島を案内して貰おうかな。」

楓ちゃんか、由夢ちゃんもしくは、音姫ちゃんにでも案内してもらうかな・・・皆の用事が無ければの話だけだね。

「さて、それじゃいきますか。“蒼破刃！”」

高速で竹刀を下から振り上げる感じで竹刀を振ると、真空波が用意しておいた木に向かっていった。ドン！

そんな音を聞こえたので、木を見てみると、木が粉々になっていた。

「相変わらず威力凄いな。使った自分でさえ驚いちゃうよ。」

鍛練はこの辺にしとこうかな。母さん起きたし。さっさと朝食の手伝いを・・・って言っても、皿を並べる位だけだね。

「（汗かいたけど、風呂は朝御飯の後で良いか）」

そんな事を思いつつ、家に戻って行った。

第七話（少年編）（後書き）

とりあえず、感想をくれたら・・・嬉しいな！

第八話（少年編）（前書き）

急いで書いたので、いろいろとおかしいかも知れませんが、ご了承ください。

## 第八話（少年編）

「（ふう）やっぱり鍛練すると汗かくね。」「僕はそう思いながら、シャワーを浴びていた。」

「ふう・・・そろそろ出るかな。」

ちなみに、家には僕とお母さんだけで、お父さんは早速仕事なのか朝早くから出掛けてしまった。

「お母さん、今日、僕初音島を探索してくる。」

「あら？誰かと一緒に行くの？」

「ん〜誰かとして訳じゃないけど・・・とりあえず楓ちゃん辺りに暇があるか聞いてみるつもりだけど・・・」

「ふうん。行くのは構わないけど、もうちょっと時間が経ってから行きなさいな。」

確かに、今は朝の9時。行っても迷惑になるだけかな。

「分かった。じゃあ、あと1時間したら行くよ。」

そして1時間後・・・

「じゃ、行ってきます。」

「暗くなる前に帰って来なさいよ。」

「分かった。」

早速楓ちゃんの家に向かった。

隣なので、すぐに着いたけどね。じゃあ、早速呼び鈴を鳴らそうかな。ピンポーン

「（楓ちゃん居るかな？）」

しかし、待ってみても誰も出てこなかった。

「（留守かな？だったら、由夢ちゃんの家に行こうっと。）」

そう思い、僕は朝倉家に向かって行った。

「（さて・・・朝倉家に着いたけど・・・由夢ちゃん達居るかな？）」

「  
考えてても、仕方がないよね。よし、押すか。ピンポン

呼び鈴を押してしばらくすると、ドアが開き中から、由夢ちゃんが  
出てきた。

「あれ？光麻お兄ちゃん、何か用でもあった？」

「ああ、いやちょっと初音島を誰かに案内して貰おうかなって思っ  
てさ。他の子は留守で居ないから、由夢ちゃんの家に来ただけど  
」

「そうなの？だったら私が案内してあげようか？」

「え？由夢ちゃんが？音姫ちゃんと純一さんは？」

「お姉ちゃんとおじいちゃんは何処かに出掛けちゃったの。」

「えー！？もしかして、由夢ちゃん一人で家に居たの？」

「うんそうだよ。でも、おじいちゃんはもうすぐ帰って来るよ。寒  
いし、一旦お家上がる？」

確かに、ちょっとだけ寒いな。

「じゃあ、お言葉に甘えて上がらして貰おうかな。」

「どんぞどんぞ」



「お邪魔します。」

「へえ、初めて由夢ちゃん達の家に入るけど、結構良い家だね。」

「ソファーにでも座るところか。」

「うん。分かった。」

「お兄ちゃん、お膝の上に座って良い？」

「良いよ おいで」

「わぁーい」

そう言っ、由夢ちゃんは僕の膝の上に座ってきた。距離が近い  
め女の子特有の良い匂いがする／／／

「でも、本当に由夢ちゃん一人で留守番してたんだね。偉い偉い」  
そう言い、僕は由夢ちゃんの頭を優しく撫でた。

「わ！くすぐりたいよお兄ちゃん・・・／／／」

由夢ちゃんが気持ち良さそうに目を細めていた。でも、何で顔を赤くしてるんだろう？

「えへへ／／／」

しかし本当に嬉しそうな笑顔だね。すると、由夢ちゃんは可愛い笑顔のままですごい発言をした

「私ね、将来光麻お兄ちゃんのお嫁さんになる!」

「お!そりゃ大きくなったら楽しみだね」

「うん 待っててね。光麻お兄ちゃん」

とても眩しい笑顔でそう言った。この時、僕はまだ知らなかった・・・あんな大変な事になるなんて・・・

しばらく由夢ちゃんとお話をしていると、純一さんが帰って来た。

「ただいま・・・おお光麻君、家に遊びに来たのかな?」

「あ・・・いえ、今日は由夢ちゃんに初音島を案内して貰おうかなって思いました。」

「ふむ・・・初音島の案内か・・・子供だけでは危ないから、私も一緒に行こう。良いか?光麻君。」

なるほど、確かに子供だけでは危ないね・・・

「良いですよ。由夢ちゃんも良いよね?」

由夢ちゃんにも同意を求めると

「ううん・・・良いよ。」

何か膨れていたけど・・・何で？

「ほほ、青春だね。じゃあ、行くか。お昼は食べたかい？」

「いえ、まだですけど・・・」

「なら、ついでに商店街でお昼ご飯を食べようか。私が奢ってあげるよ。」

「え？良いんですか？だったらお言葉に甘えます。」

「なら、行くか。」

「うん 行くか行くか」

「しかし、本当に広いですね。初音島って。」

「そうかい？さて、此処が商店街だよ。」

「うわあ、すごいですね」

人もたくさんいるし、店も多いし、とにかくすごいです。

「さて、着いた事だしお昼ご飯を食べようか。」

「はい」

「て言っても、ファミレスだけどね。」

「ファミレス？」

「ファミリレストランの事だよ 光麻お兄ちゃん」

そんな会話をしつつ、僕達はファミレスに入って行った。

「ふう純一さん。ありがとうございました。ご飯を奢って貰うなんて。」

「気にせんでも良いぞ。一々気にしてたらかったるいからね。」

「おじいちゃん。商店街までは案内したから、今度は桜公園に行こうよ。」

「ふむ。そうだね。光麻君、今度は桜公園って言う公園に行ってみようか。」

「はい。」

「早く行こ？光麻お兄ちゃん、おじいちゃん。」

由夢ちゃんはそう言うと、僕の手を掴んで走り出した・・・純一さんは歩いてたけどね。

「桜公園にて」

「此処が桜公園だよ。」

「・・・すごい。桜の木がこんなにあるなんて・・・僕、こんなのも初めてみた。」

僕の目の前の光景・・・それは、沢山の桜が咲いていた。

「これだけじゃないんだよ。この桜公園には、秘密基地があるんだよ。」

「秘密基地？」

「こっちに来て」

由夢ちゃんが手招きをしているので、着いていってみると

「！？」

何と、一本の巨大な桜の木があった

「綺麗でしょ？」

「うん・・・確かに綺麗だね・・・」

でも何か引つ掛かるな・・・何でこの一本だけこんなに大きいんだ？そう疑問に思っていると、純一さんがその疑問を解決してくれた。

「この木はな・・・願いを叶える枯れない桜なんだよ。」

「これが・・・枯れない桜・・・」

でも、枯れない桜はもう枯れたはずじゃあ・・・なのに、何で咲いてるんだ？もしかして、誰かがこの木に対して何かをしたのか？・・・考え過ぎかな。

「さて、二人共。そろそろ帰ろうか。大体初音島は案内しただろうし。」

「もうそんな時間ですか？」

腕時計を見てみると、現在午後5時。子供は帰る時間だね。

「それじゃ、帰ろうか。」

「うん」「はい」

そして、家に帰って行った・・・

「それじゃ光麻君。また何時でも遊びに来なさい。」

「はい。分かりました。」

「光麻お兄ちゃん 今日楽しかったよ」

「うん。僕も楽しかったよ」

「今度は、お姉ちゃんとかと一緒に遊ぼうね。」

「うん。分かった。」

「それじゃ、またね」

「バイバイ」

バタン。

ドアが閉まった音を聞きき、僕は家に帰った。

僕は寝る前、枯れない桜について考えていた・・・

「（何であの木が咲いてるんだろう・・・パパは枯れたって言うってたけど・・・しかも、あの木に近づいたら、何か不思議な感覚だったし・・・これ以上考えても無駄だね。さ、明日は小学校に転入するんだ。早く寝ないとね。」

「一方枯れない桜の木にて」

「・・・・・・・・」

「一人の女の子が居た・・・」



第八話（少年編）（後書き）

はいw由夢ちゃんに完全フラグ建てましたねw

何か、二話と話が矛盾しているような気がします。気がしますが、気にしない方向でよろしく願いますw

感想等、あったらよろしく願います。

第九話（少年編）（前書き）

更新遅れてすみませんでしたm（　　）m

今回は、あまり自信が無いので、↓↓↓承下さいm（　　）m

## 第九話（少年編）

次の日、僕はいつもより遅く起きた。

「ふあゝ眠い。（考え事してたらあまり寝れなかったな）」

ちなみに、考え事というのは、あの枯れない桜の事ですよ。

「さて、今日から学校に行くんだし早く準備しとこつ。」

さて、そろそろ学校に行きますか。

「行ってきまゝす」

「行ってらっしやい」

お母さんにそう言って家を出ると、丁度楓ちゃんと稟君が歩いていました。とりあえず、二人に声をかけてみましょう。

「おゝい。楓ちゃん、稟君」

二人は僕の声を聞くと、こっちに振り向いてきた。

「あ、光麻君。おはようございます。」

「あれ？光麻も学校行くのか？」

「うん。楓ちゃんや稟君と一緒に学校だよ。」

「そうですか。では、学校でもよろしくお願いしますね。」

「俺からもよろしくな。」

そんな会話をしつつ、学校へ向かった・・・因みに、学校までの道のりを知らなかったので、通りかかった二人に感謝していたのはここだけの話。

「学校にて」

「じゃあ私たちは教室に行きますね。」

「楓ちゃん達と一緒にクラスになれたら良いな」

ちなみに、楓ちゃんと稟君は一緒にクラスで、二年二組だそうです。

「まあ俺達と一緒にクラスになれるように祈っておいたら？」

「分かった。祈っておくよ。」

「じゃあ後でな。」

「後でね。」

凜君達はそう言って自分のクラスに向かって行った。

「さて、職員室行かないとね・・・。」

「・・・・・・。」

はい・・・分かってましたよ・・・こうなるって事になるくらい。

「職員室ってどこ？」・・・。」

迷子になってしまいました・・・こうなる前に楓ちゃん達に聞けば良かった。

「はぁ・・・どうしよう。」

僕がそう呟いていると、一人の女の人を通りかかった。・・・丁度良いし、職員室がどこにあるかを聞いてみましょう。

「あの……」

「はい？」

僕の声に反応して女のが、こちらを向いた。

「あの……何か用ですか？」

女の子は突然声を掛けられた事により、警戒しているようだ。さうさと用件を言おう。

「すみません……職員室ってどこですか？」

「へ？え、えつと職員室は……」

〈少女説明中〉

「……に職員室がありますよ。」

「ほうほう……ありがとうございます。これで道に迷わないで済みます。」

「いやいや、困った時はお互い様ですよ（ニコッ）」

不覚にも、女の子の笑顔にちょっとドキッとしていた。

「では、これで……あ、そうだ。今度お礼がしたいので、名前だけでも教えておきます。僕の名前は神崎光麻です。あなたは？」

「私の名前は八重桜です。」

「桜ちゃんだね 職員室までの道のり教えてくれてありがとう 今度お礼するから。」

「（いきなり下の名前で呼ばれた／＼／＼）お礼なんて良いのに。」

「（ん？何か顔が赤いような気が・・・）いや、それだと僕の気が収まらないからさ。」

「そこまで言うなら、何か考えておきます」

「うん 是非考えておいてね それじゃあね 桜ちゃん。」

「じゃあね神崎君」

（桜side）

あの子って転校生だよね・・・神崎光麻君か・・・

「（見た感じ学年も一緒だし、もし一緒のクラスだったら仲良く出来たら良いな・・・）」

あ、私も早く教室に行かないと。私は足早にその場を去った。

（職員室にて）

「ここが職員室か・・・とりあえず間に合ったな。」

桜ちゃんに教えて貰わなかったら完全に遅刻していただろう。

「さてと、入るか。（ガラ）失礼します。」

扉を開けると、その場に居た先生たちが、一瞬こちらを向いた。

「ええと・・・今日から転入してきた神崎光麻ですけど・・・」

僕が自分の名前を言うと、一人の女の先生がこちらに歩いてきた。  
凄いグラマーの人だな

「君が神崎君ね。少し来るのが遅い気がするけど・・・」

「ちよつと職員室までの道のりが分からなくて・・・これから気を  
つけます。」

「よろしい あ、ちなみに私は担任の天江夕陽ですよろしくね。じ



「やあ今から教室に向かうから着いてきてね。」

「分かりました。」

「ちなみに、神崎君のクラスは二年二組よ。」

「本当ですか！良かった。」

「あら 嬉しそうね。」

「友達と一緒にのクラスになれたので、嬉しいです。」

「あらあら それは良かったわね。」

「はい。」

僕と先生は、歩きながらそんな話をしていた。

楓 side

（教室にて）

「光麻君・・・迷わずに職員室に行けたかな？」

「さあな。でも、大丈夫だろ。」

「そうだと良いんですが・・・。」

私達がそんな話をしていると、先生が教室に入って来た。

「はい。皆席に着いてね」

皆が席に座り、静かになると、先生が話を始めました。

「はい。今日は皆に素敵なお知らせがあります」

それを聞くと、皆がざわついてきました。

「はい、静かに。」

皆が再び静かになると

「今日はこのクラスに新しい仲間が入ります。皆仲良くしてあげてね。特に女の子達 期待しても良いわよ じゃあ、神崎君 入って来て。」

く光麻 side く

「じゃあ私が呼んだら入って来てね」

「はい。分かりました。」

先生が教室に入っていくと、それまで騒がしかった教室が一変して静かになった。

「はい。今日は皆に素敵なお知らせがあります」

それを聞いたクラスの人は、また騒がしくなった。しかし

「はい静かに。」

そう言うと、またもや静かになった・・・あんまり静かだと入りづらいただけだね

「今日はこのクラスに新しい仲間が入ります。皆仲良くしてあげてね。特に女の子達 期待しても良いわよ じゃあ、神崎君 入って来て。」

「(ちよ、先生！何を言ってるんですか！そんなこと言われると余計に緊張するわ！)」

と心の中で思いつつ、深呼吸をして扉を開けた。すると、クラスの人達がこちらを見てきた。僕は素早く黒板の前に立ち、自己紹介をした。

「初めまして。僕の名前は神崎光麻です。両親の都合で、前の居た町からこの初音島に引っ越して来ました。まだ知らない事もたくさんありますが、これからよろしくお願いします(ニコッ)」

「・・・・・・・・／／／／／」

あ、あれ？皆しーんとしてる。それに皆、顔が赤いような・・・は

！もしかして、僕まづいことしちゃった!？

僕がそう思い、焦っていると先生が助け船を出してくれた。

「皆初めての転校生に緊張してるのかな？とりあえず神崎君」

「はい？」

「君の席は、あそこ。あのオレンジ色の髪をした女の子の隣だよ」

オレンジ色の髪をした女の子。つまり楓ちゃんの隣か、良かった

「分かりました。」

先生にそう言われ、席に移動した。席に座ると、楓ちゃんが話しかけてきた。

「光麻君 一緒のクラスになれて良かったですね。これからよろしくお願いします」

「うん 僕も楓ちゃん達と同じクラスになれて嬉しいよ こちらこそこれからよろしくね」

「はい」

そんな会話をしていた。

「じゃあ一時間目は神崎君の質問タイムの時間を取ります。皆どんどん神崎君に質問して良いわよ」

すると、皆が一斉に質問をしてきた。質問って言っても、定番の質問が多かったけどね。例えば好きな食べ物とか、どこから来たのか色々質問された。

そんな感じで、一時間目の時間は過ぎていった。

第九話（少年編）（後書き）

もう駄目だ（> <）何か文が滅茶苦茶だ

感想等あったらよろしくお願いします。

第十話（少年編）（前書き）

今回は、短いですが頑張ってみました。

## 第十話（少年編）

そしてあっという間にお昼の時間になった

「え？そんなのありですか？」

良いんだよ・・・俺の文才が無いから

「それを言ったら終わりなのは・・・」

「光麻君？誰に話しかけてるんですか？」

「いや、何でもないよ楓ちゃん。」

さて、ボケはこの辺にしまして・・・

今はお昼休みの時間で、皆家からお弁当を持ってきています。ちなみに、今は楓ちゃんと稟君と桜ちゃんと一緒にご飯を食べています。

「しかし、光麻と桜が知り合いだったとはね・・・」

「知り合いつて言っても、職員室が分からなくて、僕が迷っていた所に偶然桜ちゃんが通りかかった時に、道を聞いたただけなんだけどもね。」

「あの時はびっくりしたけどね。いきなり話しかけてきて、職員室はどこですか？なんて聞いてくるもんね。」

「やっぱり光麻君・・・職員室の場所が分からなかったんですね。」



「全く・・・職員室の場所が分からないなら、何で俺達と一緒に居る時に聞かなかったんだよ？」

「その・・・忘れてて・・・テへ」

ノリでやってみただけど・・・やっぱり気持ち悪いですね。今度からは止めときましようか。しかし、なぜか女の子二人組は

『ノノノノ（か、可愛いノノノノ）』

顔を赤くしていた・・・何で？

そんなこんなで、お昼休みがあつという間に終わった。

「さて・・・次の授業は何だったっけ。」

そして時間は過ぎ、放課後になった。ちなみに放課後は、上級生達が部活をやっている。

「さてと、皆帰ろうぜ。」

「あ、待ってください。」

「楓ちゃんと光麻君、早く〜」

稟君と桜ちゃんがそう言ってきた。

「稟君、僕ちよつと用事があるから先に帰ってて。」

「そうか・・・用事があるなら仕方がないな。じゃあ光麻。また明日な。」

「バイバイ〜光麻君。」

「光麻君。また明日。」

「うん。バイバイ〜」

そう言つと、稟君と桜ちゃんと楓ちゃんは帰って行つた。

「さてと・・・もう一回行つてみるかな・・・あそこに。」

あ、でもその前にママに連絡しないとね。そう思い、僕はランドセルにこつそり仕舞つてある携帯（子供が使つても大丈夫な携帯）を取りだし、家に電話した。しばらくのコール音のあとに、家に繋がった。

「はいもしもし。」

「あ、お母さん。」

「あら光ちゃん。どうかしたの？」

「今日帰るの遅くなるから。」

「あら、何か大事な用事でもあるの？」

「うん．．．とても大事な用事がある」

「ふん．．．分かったわ。でも、だからといって遅くなりすぎないようにしてね。」

「分かってるよ。じゃあお母さん。切るよ」

「最低7時までには帰って来るのよ。」

「はい。」

そう言うと、電話が切れた。

ちなみに、今の時間はちょうど5時。

「さてと．．．行きますか。」

僕は、ある目的地に歩いて向かった．．．そう、この時のこの選択により、1つの歯車が回る事を僕は知らなかった．．．。

第十話（少年編）（後書き）

光麻が向かう先とは一体どこなのか・・・

感想等あったらよろしくお願いします。やる気が出ます。

第十一話（少年編）（前書き）

結構 good good しているかも

第十一話（少年編）

「……………」

何で……

「ここは……どこだ？」

何で僕はこう道に迷うんでしょうか……方向音痴のスキルでもあるのかと考えてしまいます。ちなみに今は、見知らぬ住宅街に居ます。

「どうしよう……もう暗くなってきたし……」

今の時刻は6時過ぎ。早く行かないと帰宅までに間に合いません。

「何とか出来ないかな……ここは誰かが通りかかるのを待つか。」

僕がそう一人言を呟いていると、近くを一人の金髪の女の子が通り過ぎていった……何やら急いでるようだ。

「どうしたんだろ……あの子……ちょっと付いて行ってみようかな。」

この住宅街からも抜けれるだろうしな。

僕は、女の子を見失わないようにと、気配を消して付いていった

しばらく女の子の跡を付いていってみると、いつの間にか桜公園に到着していた。

「（ふ）何とか着きましたね。しかし、あの女の子・・・まさかとは思いますが、あそこに行くつもりなのかな？」

僕が疑問に思っていると、女の子は僕の予想通りの道を通って行った。

「・・・・・・・・・・」

予想は当たり、女の子はここへ来た。そう、枯れない桜の木がある場所だ。

「（でも、ここへ来て一体何をするつもりなんだろう・・・願いたい事でもするのかな・・・）」

僕がそう考えていると、女の子が木の前に立ち止まった。すかさず女の子に気付かれないように、近くにあった木の裏に隠れた。

「・・・・・・・・・・る」

女の子が何かを呟いているが、ここからじゃ聞こえないな・・・

「（もうちょっと耳を近づけてみようかな・・・）」

木の裏から、ちょっと身を乗り出し、声を聞いてみると・・・

「分かってる．．．僕のしようとしている事は間違えだって．．．」  
女の子の悲痛な声が聞こえた。

「でも．．．それでも僕は．．．」

「お願いです．．．僕にも．．．“家族”を下さい。」

女の子がそう言うと、桜の木が光始めた。

「（な、何だ！？）」

僕が慌てていると、光は収まり、木の近くに一人の男の子が居た．．

「（まさか．．．あの女の子が家族を下さいって願ったから．．．  
あの男の子が桜の木から生まれたのか！？）」

僕は啞然としていた。すると、男の子が目を覚まし、焦点が合わさ  
ってない目で女の子を見ていた。そんな男の子に対し、女の人は優  
しく微笑みかけ、こう言った

「桜内義之」

「えっ？」

「それが君の名前だよ。」

「さくらい．．．よしゆき．．．僕の名前。」



「今日から君は僕と一緒に暮らすんだよ。」

「……………」

男の子が呆然としてしていると

「さあ、行こう。僕達が帰る家へ。」

女の人がそう言っつて、手を差しのべていた。

「……………うん！」

男の子は突然の事に躊躇しつつも、差し伸べられた手を笑顔で握った。

僕は見るのに夢中になっていた。しかし、夢中になっていた僕は、警戒心が薄れ、身を乗り出し過ぎていた。当然、そんななかでバランスが取れる訳が無く

「！つととと」

ドーン

そんな音を立てて僕は転倒してしまった。すると、女の人が

「誰!?!」

と言っつて、こちらを見てきた。

「あちゃ〜……………バレちゃったか……………」

僕が素直に姿を現すと、女の人が男の子に何かを言っていた。

「ちょっと僕。この男の子と話があるから、義之君は彼処で待ってね。直ぐ戻るから。」

「う、うん。分かった」

男の子が何処かに行ってしまった・・・さてと、何を言われるんだろつか・・・

「ねえ。君は一体いつから見ていたの？」

「え・・・っと、最初から見えました。」

「最初から!?じゃあ僕が言っている事も聞いてたって事!？」

「は、はい・・・」

「・・・」

女の方は愕然としていた。ちょっと聞いてみようかな。

「あ・・・あの。聞きたい事があります。」

「・・・何を聞きたいのかなあ？」

女の人がこちらを睨み付けて言う。まあ、正直睨み付けても可愛いだけだねと思っただけの話

「何でこの桜の木は枯れていたのに、また咲いてるのかを聞きたい

のですが……」

「……………それは」

「それは？」

「僕が……この桜の木を再び咲かせたの……」

やっぱりか……薄々気づいてはいましたね。

「僕がやってる事は悪いことだって分かってる……でも、それでも僕は……」

「なるほど……一つ気になったんですが、この桜の木は願いを叶えるんですよね？」

「……そうだよ」

「つまり、良い願い事も叶えるし、悪い願い事も叶える……という事ですね。」

そう言って、僕は桜の木に触れてみました……何だ……この変な感じ……桜の木に何かが宿ってるのかな……

僕がそう考えていると、女の人がさらに睨み付けてきた。

「何で……」

「はい？」

「何でそこまで分かってても何もしないの！君だって、この桜の木がどれだけ危険な物か分かるでしょ！」

女の人の叫びが響いた・・・

「・・・僕は、もう一人になりたくなかったから・・・だからこの桜の木を咲かせた・・・いけない事だと分かっているけど・・・でも、この桜の木は願いを何でも叶えてしまう・・・欠陥している桜の木なの。」

「・・・」

「そんな桜の木を・・・僕は咲かせてしまった・・・だから僕が何とかしないとイケないの」

「・・・それは誰かに相談とかしたんですか？」

「・・・出来るわけないよ・・・これは僕の責任だもん。」

「そうやって一人で背負い込んで何とかするんですか？僕はそうは思いませんけど。」

「君に何が分かるの！、しょうがないじゃん！これは僕が撒いた種だし・・・」

女の人が動揺してる・・・でも、僕は思う。一人で抱え込んで悩むより、誰かに助けを求めて悩む方が良いと思う。

「分かっているのは貴女の方です！どうして人を頼らない？どうして一人で抱え込む方を選ぶ！貴女にとって、身近な人とはその程

度の存在なのか！」

「……………！じゃあ君が何とかしてくれるの！」

「ああ！何とかしてやる！俺が貴女の傍に居る。一緒に悩んでやる！だから、もう一人で背負い込むな！」

俺がそう言うと、女の方は泣き始めた。俺は女の方を抱き寄せ、そつと頭を撫でてあげてる。

「辛かったよな……一人は……」

しばらく女の人の押し殺した泣き声だけが辺りに響いていた……

「もう良いんですか？」

「うん／＼ごめんね……あんな事言っちゃって。」

「いえいえ、気にしないで下さい」(ニコッ)

「／＼／＼／＼」

やっぱり僕が笑顔を見せると皆顔を赤くするよね……何でだろう

「ねえ．．．」

「はい？何ですか？」

「さっき言ってた傍に居るって本当？」

「当たり前じゃないですか！」

「そ．．．そっか／／あ、ありがとう／／」

「い、いえ／／」

顔を赤くしてお礼を言われると、こっちまで照れます／／

「あつ、それと桜の木に関しては今は何も出来ません。」

「な、何で！」

「今の僕の体では、限界があるからです．．．何とかするにしても．．．あと7年は必要です。」

「そっか．．．でも、無理はしないでね？」

「分かってますよ。」

「だったら良いけど．．．あ、自己紹介がまだだったね。僕は芳乃さくら。君は？」

「僕の名前は神崎光麻です。」

「へえ〜光麻君か〜良い名前だね」

「さくらさんこそ。可愛い名前じゃないですか」

「にゃはは／＼／＼ありがと／＼／＼あ、さん付けは無しね。名前で呼ぶこと（ビシッ）」

さくらさんが人差し指を真っ直ぐ伸ばして言った。

「え．．．えっと．．．さ、さくら／＼／」

「うんうん よろしい」

うっ．．．何か恥ずかしいな／＼

「じゃあ、これからも宜しくね 光麻君<sup>ニッコ</sup>」

「は、はい！〜こちらこそ宜しく（ニッコ）」  
その場には、笑顔があった．．．

「それより光麻君。時間大丈夫？」

「え？．．．あああ！」

マズイ．．．非常にマズイ。さくらの説得が意外にも時間がかかっ

たため、現在8時オーバー。つまり、お母さんが言っていた時間までに間に合わなかったって事になりますね。

「にははは こんなに暗いし、僕と義之君と一緒に帰ろうか」

「あつ、はい」

「さ、行こ？義之君が待ってるし。」

「はい」

一方義之はというと・・・

「うう・・・さくらさんまだかな？」

一人ぼつりと居た。



第十一話（少年編）（後書き）

さくらにフラグを建てましたねw

でも何か・・・文章駄目だな～ああ、テスト面倒だな～

感想等ありましたら、宜しく願います。

第十二話（少年編）（前書き）

今回はちょっと自信がありませんが、見ていってください

第十二話（少年編）

「　」

僕は今、さくらと義之君と一緒に手を繋いで帰っています。あ、ちなみに、義之君とはもう自己紹介しましたよ。

「随分嬉しそうですねさくら。」

「うん 当たり前だよ なんてって・・・大切な二人に出会えたんだからね」

「さ、さくらさん・・・」

「僕も、さくらは大切な人だよ。ね、義之君？」

「え？・・・うん！当たり前だよ！」

「にははは ありがとう義之君 光麻君・・・ただ、光麻君の場合はちょっと違うんだけどね・・・」

「え？何が違うんですか？」

「いや、まだ分からなくて良いよ・・・まだ子供だもんね」

「??????」

さくらの言いたい事がよく分かんないな・・・まあ良いかな。

ちなみに、今の状態はさくらの左手を僕が繋いでて、右手を義之君が繋いでる状態だよ。

「（しかし．．．枯れない桜の木をどうすれば良いのか．．．多分下手に制御したら、義之君がどうなるか分からないな．．．まだ時間はあるし、考えておきましょうか。）」

そんな事を考えながら歩いていくと、いつの間にか朝倉家に着いていた。

「ここが今日から君の家だよ」

「ここが？」

義之君は戸惑っているようだ。そんな義之君をお構い無しに、さくらは、チャイムを鳴らした。すると、ドアが開き、中から由夢ちゃんと音姫ちゃんが出てきた。

「あ、さくらさんと光麻お兄ちゃんと．．．誰？」

由夢ちゃんが義之君をじつと見て、さくらにそう聞くと

「じゃはは こんばんは由夢ちゃん。

「こんばんは。」

由夢ちゃんが挨拶をする。

「この子が前に言った桜内義之君だよ」

「うんうん」

由夢ちゃんが二回首を振って頷く

「え．．．あの．．．その」

頷いても尚じーっと見る由夢ちゃんと音姫ちゃんに対して、義之君が対応に困っている、さくらが

「じゃあ僕はお兄ちゃんと話して来るから　じゃあ義之君？由夢ちゃんと言姫ちゃんにきちんと自己紹介しなきゃダメだよ？」

そう言つと、さくらは家の中に入って行った。突然の事に義之君が戸惑つて

「え．．．ちょっとさくらさん！」  
と呼ぶと、さくらが

「ちゃんと仲良くしないとダメだよ」

と返事をして家の中に入って行った。

『じー』

二人が義之君をじっと見ている．．．二人ともじっと見すぎだよ

「ううう」

二人の視線に耐えれなくなったのか、義之君が助けを求めてこちらを見てきた。

「ほら。早く自己紹介しないと。いつまでもここにいるつもりなの？」

僕が義之君に聞くと、恥ずかしながらも、言う気になったみたいで

「えっと・・・その・・・ほ、ぼくのなまえはさくらい よしゆきです。」

と言って左手を差し出した・・・が、二人は差し出された手をじっと見ていた

「あ、あはは・・・」

堪らず義之君は苦笑いをした。すると由夢ちゃんが出された手を両手で包み込み

「ゆめ」

「え?」

「あさくら ゆめ」

と、僕と初めて会った時と同じように言った。

「ゆめちゃんか・・・」

「うん。その、これからよろしくね・・・よしゆきお兄ちゃん／＼／＼」

由夢ちゃんは恥ずかしそうに顔を赤くして言った・・・正直由夢ちゃんが可愛く見えて、ドキドキします。すると、ずっと黙ってた音姫ちゃんが義之君の方を向いて一言

「あさくら おとめ」

と言って、家の中に入ろうとしていた。

「音姫ちゃん」

僕がそう呼ぶと、こっちに振り向いた。

「何？」

「何か困った事があったら、僕に相談してね」(ニコッ)

「／／／分かった。」

音姫ちゃんは顔を赤くしながら返事をした・・・何で顔が赤くなるんだろうか・・・

「お家に入ろう」

由夢ちゃんが笑顔でそう言った。

「お、お邪魔します」

はあ・・・ここはお邪魔しますじゃなくて

「『ただいま』だよ」

僕と由夢ちゃんが同時に言った

「え？」

「これからは、義之君も家族の一員なるんだよ？」

僕がそう言つと、義之君はハツとした表情になり、最後は笑顔でこ  
う言つた

「ただいま」

「うん。おかえり」

由夢ちゃんが笑顔でそう言つた。

しばらくした後、僕は由夢ちゃん達に挨拶をして、ダッシュで家に  
帰つた……

無論、家に帰つたら、お母さんとお父さんにこっぴどく叱られたの  
は、言うまでも無い……



第十二話（少年編）（後書き）

さて、遂に義之が朝倉家と接触しました。これからどうなることやら・・・

感想等ありましたらよろしく願います。

第十三話（少年編）（前書き）

今回はオリジナルの話です

### 第十三話（少年編）

次の日の朝、僕は5時に目を覚まし、寝間着からジャージに着替えて家を出た。

「今日は桜公園でも走ろうかな」

日々の鍛練を怠らない・・・と、お父さんによく言われるので、早くから起きて鍛練しています。

「よし！行ってきます」

外に出ると、まだ空は薄暗く肌寒い感じだった

「（学校もあるし、今日は最初から全開で行こうかな・・・）」

僕はそう思い、桜公園に向けて足を進めた・・・

作者「ちなみに、我らが主人公、光麻君は身体能力が異常なので、足はとても速いです」

「ん？何か今、失礼な事を言われたような・・・まあいつか」

（桜公園にて）

「ほっほっほっ……」

僕は今、桜公園全域を走っています。大体7周位走りましたね。

「ふう……さてと、そろそろ帰ろうかな……ってあれ？」

誰かが噴水の近くのベンチに座ってる……多分年は僕と同じ位の女の子で、髪の色は水色の綺麗な髪の色をしている。

「（でも……あの子何であんなに悲しい表情をしているんだろう……よし！声をかけてみようかな。）」

多分声をかける気になったのは……放って置けなかったからだね。

「あ～」

「………何ですか？」

少女はこちらを向いて返事をした。

「こんな朝早くから何をやってるんですか？」

僕は、気になった事を聞いてみた。

「別に……」少女は相変わらずの無表情で答えた。僕は、内心溜め息をはきながらも一つの質問を試してみた。

「そうですか……ではもう一つ。何故君はそんなに悲しそうな顔

をしているの？」

「……………」

少女は黙ってしまった……が、何かを決めた表情をすると、僕に話してくれた。

「私ね……お父さんとお母さんに捨てられたの」

「え？」

「私の両目の色が気持ち悪いつて……まるで、獣でも見ているかのように言われたの……ハハ……二人とも怯えてたな……」

少女が笑いながら……そして、泣きそうな表情で話してくれた……

「（この現実には辛すぎる……確かに、この子の両目の色は赤色です……だが、ただか両目の色が違うからって自分達の娘を嫌悪し……そして、拳げ句の果てに捨てるという行為に出た……最悪だな）」

僕がそう考えていると、少女はこう言った。

「私……どうすれば良いのかな？……学校のクラスの子も私に話しかけてこないし……」

「もうやめろ……」

少女が、淡々と自分の事を話してくれる事に、耐えれなくなった僕

は、少女にそう言った。

「もう・・・言わなくて良いから・・・君がどれだけ辛かったのも分かった・・・」僕はそれだけ言うと、少女の体を抱き締めた

「この小さい身体で、どれだけの辛い事を体験したことも分かった・・・君が独りぼっちだったって事も分かった・・・でも、これからは一人じゃない・・・」

「え・・・」

これだけは・・・これだけ少女に言いたい

「僕が君の傍に居る」

「・・・」

少女の体が震えてるのが分かる・・・そして

「グス・・・うわあああん！」

大声で泣いた・・・今までの辛さを洗い流すように・・・

「これからは、僕も一緒だ・・・僕のお母さんもお父さんも、笑顔で君を迎えてくれる・・・」

僕はそう言って、少女の頭を優しく撫でた・・・

くしばらくして〜

「落ち着いた？」

「う、うん／＼／＼／＼．．．その．．．あ、ありがとうね／＼／」

「困った時はお互い様」(ニコッ)

「／／／／／／／／」

少女は顔を真っ赤にしていた．．．何でだろうね？

「さてと．．．今は5時40分か．．．それじゃあ帰ろうか」

「で、でも本当に大丈夫なの？．．．迷惑になったりするんじゃないのかな？」

「大丈夫 お母さんもお父さんも優しいから、きっと君の事を迎えてくれるよ」(ニコッ)

「な、なら良いけど／＼／＼(もう)／＼／＼笑顔がかっこよすぎるよ／／／」

「そう言えば、君の名前は？」

「あ、私の名前は一ノ瀬 悠奈．．．あ、でもこの場合、上の名字は無して、下の名前だけになるのかな。」

「成る程、悠奈ちゃんか じゃあ僕の番だね 僕の名前は神崎光麻

よろしくね」「（ニッコッ

「う、うん／＼／＼よろしくね／＼／＼（だから笑顔は反則だよ／＼／＼）」

悠奈ちゃんの顔が真っ赤だけど・・・大丈夫かな？

「それじゃあ、今度こそ帰ろうか あ、そうだ。手を繋いで帰ろうか てか、繋いで帰らないと僕の家まで案内出来ないからね」

僕はそう言って、右手を差し出した。

「う、うん。分かった／＼／＼」

悠奈ちゃんは、照れながらも、差し出した僕の手を握った。

「じゃあダッシュで帰るよ。」

「え？・・・ちよ！速すぎるよ」

持ち前の身体能力を全開まで使い、猛ダッシュで家に帰った

（光麻が帰った後の桜公園にて）

さくらside

僕は、朝早くから枯れない桜の木の調整をしていた・・・その帰りに、誰かが居るな～と思い、ベンチの近くにある木に隠れ、話を立



ち聞きしていた。

「（あれ？この声は・・・光麻君と・・・誰？）」

声を聞くと、光麻君と、知らない女の子が話をしていた。

「何を話してるんだろう・・・」

僕は興味本意で聞いてしまった・・・でも、話している内容は残酷だった・・・あの女の子が、両親に捨てられるなんて・・・しかもまだ子供の女の子。聞いていて辛かった・・・すると、光麻君が女の子を抱き締めた・・・その時、一瞬心に「ズキッ」という痛みが走った・・・でも、その痛みはすぐに無くなった・・・

「（僕・・・どうしたんだろう？）」

そんな事を考えていると、話が終わった様で、光麻君が女の子の手を繋いでダッシュで帰って行った・・・どうやら少女の名前は悠奈ちゃんと言っらしい・・・

「光麻君・・・君はスゴいね・・・でも、あの女の子羨ましいな・・・妬いちゃうよ、光麻君・・・」

僕はそんな事を呟きつつ、家に帰って行った・・・

さくら side out

家に帰って、お母さんとお父さんに事情を話すと、二人とも悠奈ちゃんを笑顔で迎えていた。

「悠奈ちゃんの両目綺麗だね」

「ふえ！？／＼／＼あ、ありがとう／＼／＼・・・」

第十三話（少年編）（後書き）

今回はオリキャラを出してみました・・・ggggdにならなきゃ良  
いですけどねw

今考えたら、主人公のラバーズ凄いですねwまあ関係無い  
ですけどねw

感想等ありましたら、よろしく願います。

あと、テストが近いですので更新が遅くなります。すみませんm)

— — ) m

## オリキャラ紹介1（前書き）

今回は、友達に言われて作ったオリキャラの設定です

## オリキャラ紹介1

名前：神崎 悠奈  
かんざき ゆうな

年齢：7歳

身長：光麻と同じ位

体重：???kg（女の子に体重を聞くななんて失礼だよ）

性別：女

髪色：水色

見た目：髪を伸ばしており、大体腰に届く位の長さをした髪に、アホ毛が2本立っている

性格：主人公に出会う前は無愛想な感じだったが、出会ってからは天然な女の子に変わった

魔力ランク：????

目の色：両目とも赤

産まれた時から両目が赤く、両親に気味悪がられていた。さらに、学校でも両目が赤いという理由で友達が出来なかった。

そんな環境のせいで、無愛想な性格になってしまったが、主人公に出会い、かなり変わった

ちなみに、人生を諦めかけた時に、救ってくれた光麻に惚れてしま  
った

イメージCV：豊崎愛生

## オリキャラ紹介1（後書き）

テストが終わったので、とりあえず設定だけでも書いてみました。

第十四話（少年編）（前書き）

前半若干シリアスっぽいです。



## 第十四話（少年編）

「（親に捨てられる…か…）」

僕はシャワーを浴びつつ、そう考えていた。ちなみに悠奈ちゃんは  
今、朝御飯の準備を手伝っている

「（悠奈ちゃんは…多分今までずっと一人で生きてきたんだと思う  
…辛い事だよな…想像したくないよ。）」

どの世代でも、捨て子というのは居るもんなんだ…

「（出るかな…）」

僕はそう結論付けて、風呂場から出た

学校の準備を済ませ、朝ご飯を食べて家を出た。ちなみに、悠奈ち  
ゃんは家でお父さんと一緒に居るよ。何でも、いろいろと手続きを  
しないといけないとか…

「さて…今日も頑張って行きますか」

「学校にて」

下駄箱で靴から上履きに履き替えて、自分の教室に入ると、中には楓ちゃんが居なかった…何故？とりあえず、僕は桜ちゃんと稟君に挨拶を試みることに

「おはよう」桜ちゃん、稟君

「あ、光麻君 おはよう」

「遅いぞ光麻」

「ごめんごめんちょっと野暮用で……ってあれ？今日、楓ちゃんは？」

「何か今日は風邪で休むらしいぞ」

「心配だよね……」

「風邪か…ねえ桜ちゃん、稟君」

「何？（何だ？）」

「今日学校が終わったら、一緒に楓ちゃんのお見舞いに行かない？」

「お見舞いか？良いな」

「私も良いよ」

「じゃあ、学校が終わったら行くわね」

「うん」「おう」稟君と桜ちゃんが返事をした後に、タイミング良く予鈴が鳴ったので、僕は自分の席につくと、これまたタイミング良く先生が入って来た。

「は〜い座って座って〜」

しかし、いつ見ても先生は若く見えますね

そんなこんなで放課後

「またですか？本当に文才が無いんですね」（黒笑）

作者「うっ……言い返す言葉もありません」

「お〜い光麻、何してんだ〜早くしないと置いてくぞ〜」

「あ、今行く〜」（作者と無駄話をしてたら置いていかれそうになっちゃった）

気を取り直して……

今、僕達は楓ちゃんの家に向かっています。先生にお見舞いに行くと言ったら、今日の宿題のプリントを楓ちゃんに渡しておいてねと言われました

「楓ちゃん…大丈夫かな？」

ふと、桜ちゃんがそう呟く

「大丈夫だって」

僕がそう言っていると、桜ちゃんは複雑な表情をして

「なら良いけどさ……」

と返事をした… 実際僕も心配なんだよね。楓ちゃん、意外に病弱に見えるからね…

僕達がいろいろと話をしていると、楓ちゃんの家に着きました。

「じゃあ呼び鈴鳴らすね」

二人にそう言い、僕はインターフォンを押した。中から「はい」という声が聞こえた。ドアが開くと、楓ちゃんのお母さんが出てきました

「あら？皆してどうしたの？もしかして楓のお見舞い？」

「はい、ちょっと楓ちゃんが心配になったのと、宿題のプリントを届けに来ました」

楓ちゃんのお母さんが聞いてきたので、僕が答えると

「まあまあ わざわざありがとうね 楓なら二階に居るから、どうぞ上がってってね」

楓ちゃんのお母さんは僕達を家の中に招くと、皆のサイズに合ったスリッパを置いて、リビングの方へ向かって行った。

『おじやましまーす』

そう言っ僕達は、家の中に入って行った。

階段を上がり楓ちゃんの部屋の前まで来ました。

(コンコン)

「楓ちゃん？入るよ〜」(ガチャ)

ノックをして、僕がそう言い扉を開けると、楓ちゃんが驚いた顔をして此方を向いてくれた。

「み、皆してどうしたんですか!？」

「えっとね、楓ちゃんのお見舞いに来たんだよ その様子だと、明

日は学校に來れそうだね」

「はい 熱も下がりましたし、明日には学校に行けると思っています。お見舞いに来てくれてありがとうございます。」

「良かった〜楓ちゃんが元気になってて」

桜ちゃんがため息をついてそう言う

「桜ちゃん……心配掛けてごめんなさい。」

「うん 楓ちゃんが元気になったのならそれで良いよ」

「そうだな 俺も楓が元気になったなら良いよ」

「僕も楓ちゃんの元気な顔を見て嬉しいよ」(ニコッ)

「／／／光麻君…桜ちゃん…稟君…ありがとうございます」  
楓ちゃんが頬を赤くして僕達にそう言った……しかし、何でまた頬を赤くしてるんだろ…もしかして、本当はまだ風邪が治ってないのかな？

「ちよつと楓ちゃん…失礼」

「え？」

コッソ

僕は、熱があるかも知れないと思い、楓ちゃんのおでこに自分のおでこを当てた。

「んゝ熱はあんまり無いんだな……」

「あわわわ／＼／＼／＼」

「つて楓ちゃん！？さらに顔が赤くなってるけど大丈夫！？」

「あわわわ／＼／＼、その大丈夫です／＼／＼」

「そ、そう？楓ちゃんがそう言うなら良いんだけど」

「あっ………」

僕が自分のおでこを離すと、楓ちゃんが名残惜しそうに声を出していたけど……何故？

「良いなあゝ楓ちゃん」

「さ、桜ちゃん！」

「ねえ光麻君。私も、熱があつたらああやってしてくれろ？」

桜ちゃんがなぜかそう聞いてくるので僕は、良いよと言うと、桜ちゃんが嬉しそうにしていました。その時に、稟君が鈍感と言っていました……何でなの？

それから、四人でいろいろとお話をしていると、皆帰る時間になったので帰る事にしました

「それじゃ楓ちゃん 明日は一緒に学校に行こうね」

「はい 今日はお見舞いに来てくれてありがとうございます」

「うん 私も楓ちゃんが元気で良かったよ じゃあまた明日学校でね」

「また明日」

楓ちゃんはそう言って、家の中に入って行った

「さてと、俺達も帰ろうか？」

「そうだね じゃあ私があっちの道だから」

「そうか。じゃあ桜ちゃん、また明日」

「バイバイ」

桜ちゃんは、僕達に手を振って帰って行った

「じゃあ行くか。」

「そうだね」

僕と稟君も自分の家に帰って行った……

～自宅にて～



「ただいま」

「おかえり」光麻君

僕が家に帰ると、悠菜ちゃんが玄関に来てくれた

「何だか悠菜ちゃん嬉しそうだね」

「うん 光麻君が帰って来たからね」

「そう言ってくれると嬉しいよ」

「ふふ」

悠菜ちゃんと、そんな会話をして部屋に戻ると、僕は学校の宿題を  
晩御飯までにパツと終わらせ、学校の準備を済ますと、下からお  
母さんの声が聞こえてきた

「ご飯出来たわよ」

「今行く」

という定番の返事をして、下まで降りて行きました

晩御飯を食べ終えて、お風呂に入っている時に、悠菜ちゃんがお風  
呂に入って来たので一緒に入りました……ちよっと恥ずかしかった

ですけどね／＼／＼そんなこんなで1日が終わった……ずっとこのよ  
うな日々が続けば良いと思った……

第十四話（少年編）（後書き）

更新が遅れてすみませんでした…テストのせいだ

感想等ありましたらよろしく願いします。あと、今回悠菜の字が  
違いますが、これは仕様です

第十五話（激動編）（前書き）

更新遅れました。すみません。タイトルは適当ですm（  
）（  
）m

## 第十五話（激動編）

次の日の朝、僕の部屋に誰かが入って来ました

「光麻君、朝だよ」

悠菜ちゃんが起こしに来たようだ。ちなみに今日は休日なので、いつもより遅く起きようと思っていました

「うん……」

「ほら、早く起きて、朝ごはん無くなっちゃおう」

「うう……おはよう悠菜ちゃん……」

「うん おはよう さ、早く着替えてご飯食べよう」

「うん……分かった」

悠菜ちゃんは、僕がそう返事をする、下に降りて行った

「ふわあ……さてと、さっさと着替えるかな……」

僕は素早く着替えを済ませ、下に降りた。

「ちなみに、何で休日かというと、作者がダメダメだからだそうです」（黒笑）

作者「す、すみませんでした!!」

「ごちそうさまでした」

「はい お粗末さまです」

朝ごはんを食べ終え、今日は何をしようか考えていると、お父さんが思い出した様に僕に言った

「そういえば、さっき朝倉さんから電話があつて、光麻に用があるから来てくれって言ってたぞ」

「何の用事だろう……まあいいや。分かった行ってみる」

「あんまり迷惑の無いようにな」

「分かつてるよ。じゃあ、行ってきまーす」

「いつてらっしやい光麻君」

悠菜ちゃんがそう言ったのを聞いて、僕は朝倉家に向かった。

僕が朝倉家に着くと、中から純一さんが出てきました……タイミンが良いですね

「やあ光麻君。来てくれたみたいだね」

「はい。純一さんからの頼みでしたので」

「そうかそうか」

「あの…ところで、今日は何のようでしたか？」

「うむ。由夢と義之君がな、君をある所へ連れていきたいと言っ  
な…」

「ある所？」

「まあ詳しくは、行ってみた方が早いだろう。説明するのだった  
いし」

「は、はあ…」

何だか良く分かんないけど、どこかに連れていってくれるらしい…  
しばらくすると、中から由夢ちゃんと音姫ちゃんと義之君が出てき  
たので、早速ある場所とやらに行ってみることに…

しばらく歩いていると、大きな病院に着きました

「ここは？」

僕が聞いてみると、音姫ちゃんが

「風見病院だよ……」

と、小さい声で呟いた

「風見病院……病院って事は、誰か入院してるの？」

僕は音姫ちゃんに問うが、答えてくれずさっさと院内に入ってしまった……

「（何だか悲しいな……）」

そう思っていると、由夢ちゃんが

「ここには、私達の大切な人が居るんだよ……」

「大切な人……」

「さ、中に入る。」

義之君がそう言ってきたので、早速中に入ることに……

しばらく歩くと、一つの病室の前で由夢ちゃん達が立ち止まった



「ここだよ」

「ここが……」

そう呟いていると、純一さんがドアをノックしていた。すると、中から女の人？の声が聞こえた

「どろどろ」

という声を聞くと、由夢ちゃんが真っ先にドアを開けた

「お母さん！」

「あら～由夢ちゃん元気ね～皆も元気そうで……ってそちらの子は？」

「あ、えっと、神崎光麻といいます。」

「へえ～君がウワサの神崎光麻君か～由夢ちゃんからよく聞くよ君の事」

「お、お母さん！／／／／」

どつやら由夢ちゃんが僕の事を話していたらしい……でも改めて聞くと嬉しいな

「あ、私の名前教えてなかったね。私の名前は朝倉 由姫、音姫ちゃん達の母です」

「母って……こんなに若いのに……ですか？」

「嬉しい事言ってくれるわね」

「い、いえ思った事を言ってみただけです／＼」

それからしばらくお話をしていると、あっという間に時間が過ぎ、外は夕陽が見えるようになっていた。

「もうこんな時間か…」

僕が小さい声で呟くと、由姫さんが

「時間ってというのはあっという間に過ぎていくわね」

と答えてくれた。

「さて、そろそろ帰ろうか」

純一さんがそう言っていると

「もうそんな時間か〜じゃあお母さん、また明日ね」

「待ってるわね」

音姫ちゃんと由姫さんがそんな会話していたので、僕はこう言ってみることに

「あ、あの」

「ん？何か？」

「僕も一緒に行っても良いですか？」

「あら 来てくれるなら良いわよ」

「あ、ありがとうございます！」

「話は終わったかい？」

「はい！」

「じゃあ帰ろうか」

「バイバイお母さん」

由夢ちゃんがそう言つと

「ええ」

という由姫さんの返事が聞こえた

それから家に帰り、悠菜ちゃんが出迎えてくれたり、晩御飯を食べたり、家族といろいろ雑談さたり、お風呂に入ったら相変わらず悠菜ちゃんが一緒に入ってきたりした。

部屋に戻り、ベッドに横になって、僕はこう考えていた

「（朝倉由姫さんか…とても良い人だったな…でも、病院に居るって事は何か病気があるって事だよね…何だろう？…ああ！分からない事を考えても仕方がない。さっさと寝よう…）」

僕は考えるのをやめて早く寝ることにした…

ガチャ

「光麻君…寝てるよね？よし！」

モゾモゾ

意識が薄れゆく前に、誰かが僕のベッドに入ってきた気がした…

第十五話（激動編）（後書き）

今回は由姫さんとの接触ですが……相変わらずの駄文ですね（苦笑）

感想等ありましたらよろしく願います。

第十六話（正義の魔法使い）（前書き）

更新遅れてすみませんでした。

## 第十六話（正義の魔法使い）

とある休日の昼間…僕は家の中で、今までの事を振り返ってみた…

僕はいろんな人に出会い、いろんな事があつた。

例えば、いつもは楓ちゃんや稟君に桜ちゃんと遊んだりしていましたが、義之君や由夢ちゃん、音姫ちゃんも一緒に遊んだりしました…まあ、音姫ちゃんは相変わらず無愛想だったけどね。

またある時は、純一さんから魔法を教えてもらいました。由姫さんのお見舞いもたくさん行きました

そんなこんなもあり、ふと気づけば、僕が初音島に来てもう5ヶ月が経ちました…つまり、今は8月ですね

「時間が経つのは早いね」

青に染まった空を見て、僕はそう呟いた

でも、この5ヶ月は決して楽しい事ばかりではありませんでした…

何故かって？…それはね…由姫さんが亡くなってしまった事です

あの時、僕はしばらく立ち直れませんでした…自分に力があれば…  
そう考えていました…

でも、いつまでも落ち込んでいれば、亡くなった由姫さんが悲しんでしまう…僕と義之君に言った言葉を守るために、僕は落ち込んではいられないと思い、立ち直る事が出来ました…ちなみに、由姫さ

んが言った言葉とは…

「音姫ちゃんと由夢ちゃんをよろしくね」

そう言ったのだ…

しばらくすると、義之君も、由夢ちゃんも立ち直る事が出来たんですが、音姫ちゃんだけは未だに立ち直る事が出来ません…無理もありませんね。自分が大好きだった人が死ぬ…しかもそれが自分の母親…それは、どれだけ辛い事か…親が居る僕には分からない…でも…それでも…それでも僕は…

「ふう…気分変える為に桜公園まで散歩でもしようかな…」

一旦考えるのを止めて、僕は散歩するために外に出た…

しばらく歩いていると桜公園に着きました。僕は、ちょっと休憩をしようかと思い、どこか座れるところを捜しました…するとどうした事でしょうか、音姫ちゃんがベンチに座っていました…

僕は、家で考えていた事を思い出して、音姫ちゃんを立ち直らせようと思い

「…いつまでもこのままではいさせるわけにはいかないよね…」

そう小さく呟いて、音姫ちゃんが座っているベンチへ向かった…

ベンチの近くまで行くと、音姫ちゃんは僕に気がついたみたいでこ



ちらを見てきた

「音姫ちゃん……」

「何？」

「その……さ、こんな所で一人で居ないでみんなと一緒に遊ぼうよ」

「いい……私は一人の方が良いの」

「それにさ……義之君から聞いたんだけど、あんまりご飯も食べてないみたいだし……由夢ちゃんも心配してたよ……」

「私には関係無い」

「関係無いって……自分が死んじゃうかもしれないだよ？」

「いいの。私は死んでお母さんのところに行くの」

「そんなの……間違ってるよ」

「……」

「確かにさ……由姫さんが亡くなった事は悲しいと思うよ……僕もシヨックが大きかった……でもさ、それで自分まで死んじゃったらさ、天国に居る由姫さんだって悲しむと思うんだ」

「……」

だんまりって感じかな……だったら、純一さんから教えてもらった魔

法を使ってみようかな……

僕は右手を握り、意識を集中させて頭の中で大福をイメージした。右手を開くと大福が乗っていた。

すると音姫ちゃんは、僕の右手に乗った大福を見て驚いた顔をしていた。

「あなた…魔法が使えるの？」

「まあこのぐらいしか出来ないけどね…ほら、食べてみて」

僕がそう言うと、音姫ちゃんは大福を食べた

「……美味しい」

「はは、良かった。口に合わなかったらどうしようかと思ってたけど…」

「そんな事ないよ」「ニッコッ」

音姫ちゃんはそう言うと、僕に笑顔を向けてくれた…

「（ああ…これが本来の音姫ちゃんなんだ…なんだかドキドキする／＼／＼）」

「私もお返ししてあげるね」

「え？」

音姫ちゃんが僕にそう言くと、同じく右手を握った。手を開くと、同じ大福が音姫ちゃんの右手に乗っていた

「!…音姫ちゃんも魔法が使えるの?」

「そうだよ。ほら、食べてみてよ」

僕は太福を掴み、食べてみると、美味しくて温かい気持ちになれました

「美味しいよ音姫ちゃん」

「ふふ あのね、一つ話をして良いかな?」

「うん 良いよ」

「私ね…魔法使いなの」

「魔法…使い?」

「うん。悪い人から皆を守ったり、この初音島を守る正義の味方」

「正義の…味方」

「あなたも魔法が使えるでしょ?だったら、今日からあなたも私と同じ正義の味方なんだよ」

「!…僕が正義の味方…」

正義の味方か…なんだかかっこいいな。そう考えていると

「でもね…魔法使いは皆に正体を秘密にしとかなきゃいけないの」

「秘密に？」

「そうだよ。だから、あなたと私は秘密を共存することになるね」

「確かにそうだね」

「だから私とあなたは一心同体だよ」

「一心同体か、良い響きだね」

「うん、これからもよろしくね光くん」(ニコッ)

「／／／こ、こちらこそよろしくね音姫ちゃん」

不覚にも音姫ちゃんの笑顔にドキドキしてしまった

それから、僕と音姫ちゃんはなぜか手を繋いで帰っていった…なかなかドキドキしたな

家に着くと、僕は急に眠くなったので自分の部屋のベッドに寝転がると睡魔に襲われ、眠ってしまった…

「あれ…ここはどこ？」

僕は目を開けると、真っ白な空間に立っていた…そして、目の前に

は耳が尖ってる綺麗な女の子がいました…僕はすかさず声を掛けてみる事にしました

「君は…だれ？」

「……っ！あ、あんた私が見えるの！？」

「え？…み、見えますけど…」

「……っ！？もう時間ね…」

「じ、時間？な、何の事ですか？」

「気にしなくて良いわ…あんた！私の事を覚えておきなさいよ！私もあんたの事忘れないから！」

そんな声を最後に聞いて、僕の意識は落ちていった……

**第十六話（正義の魔法使い）（後書き）**

はい、今回は音姫のお話と謎の少女の話でした。文は相変わらず駄文ですけどねw  
さて、もうそろそろ少年編は終わります。

2012年12月24日リメイクしました

第十七話（悪夢のカウントダウン）（前書き）

何とか更新しました…遅れてすみません。

では、ごんごん…

## 第十七話（悪夢のカウントダウン）

「ん……ふわあ〜……あれ？今何時だろう……」

僕が目を覚ますと、外は暗くて、月明かりが綺麗だな〜って思いました……

「ん〜と……19時30分か〜あのまま寝ちゃったんだ……あ、そうだ。楓ちゃんの家に行かなきゃ……」

多分悠菜ちゃんはもう行ってるだろう……さつさと僕も行こう……

ちなみに、何で楓ちゃんの家に行かないといけなかつて言うのと、僕の両親と稟君の両親と楓ちゃんのお母さんが旅行に行っているからである。いつも頑張っているので、夫婦水入らずという事で僕達は家に残りました

しかし、子供だけで家に残るのはいけないので、幹夫さんが残って僕達の面倒を見てくれるそうです。その為、寝泊まりや食事は楓ちゃんの家ですることになりました

「しかし……何だったんだろう……あの夢……それにあの子は一体……分らない事を考えても仕方がないか……」

さつさと楓ちゃんの家に行こう……僕は家の鍵を持って玄関へ向かい、ドアに鍵をかけて楓ちゃんの家に向かった



楓ちゃんの家に着いた僕は呼び鈴を鳴らす事にした

「さっさと呼び鈴鳴らしてドアを開けてもらおう……」

ピンポーン

呼び鈴を鳴らすと、中から誰かがドタバタと玄関へ走ってくる音が聞こえた

ガチャ

「光麻君、ようやく来たね」

中から出てきたのは悠菜ちゃんだった

「ごめんね悠菜ちゃん……ちょっと寝ちゃって」

「良いよ良いよ。さ、中に入って入って」

「う、うん。分かった」

悠菜ちゃんにそう言われて僕は家の中に入った

リビングに行くと楓ちゃんと稟君と幹夫さんが居ました

「お！やつと来たな光麻君」

「幹夫さん、3日間よろしくお願ひします」

「いやいや、畏まらないで良いぞ光麻君」

「それより四人集まったし、一緒にゲームしようぜ」

稟君がそう言ってお泊まり用のカバン？から出したのは、ゲームキープだった

「丁度コントローラも4つあるしさ」

更にコントローラも一緒に出してきた。

「ソフトは何があるの？」

悠菜ちゃんがそう聞くと、稟君が中から某赤い帽子を被ったキャラクターがカバーに写っている箱を出してきた

「これは… オパーティー5？」

「リオパーティー5かあ」

「どんなゲームなんですか？」

楓ちゃんが疑問に思っていたので、僕が答えました

「まあ簡単に言うと、家族でも楽しめるパーティーゲームって事」

「なるほど」

僕と楓ちゃんが話をしていると、準備が終わったみたいで悠菜ちゃ

んがゲームを起動していた

「起動したよ〜」

「よし、早速やるるか」

そんな感じで、僕達は時間を忘れるまで遊び尽くした…

ちなみに、罰ゲームとして一位の人は最下位の人に一つだけ命令が出来るルールを途中からやったところ、なんと初心者の楓ちゃんが一位で僕が最下位になってしまったので命令として、一緒に寝てほしいとのことだ…

ただ…その時悠菜ちゃんが出していたドス黒いオーラは忘れられないでしょう…ちなみに、悠菜ちゃんと稟君は空いている部屋で寝るそうです…

お風呂から上がり、楓ちゃんの部屋に向かいました

「一応ノック位しようかな…」

コンコン

「楓ちゃん？入るよ〜」

僕がそう言つと、どつぞつという声が聞こえたので、入る事に  
ガチャ

部屋に入ると、楓ちゃんがベッドに座っていた

「よ、ようこそ／＼」

「う、うん／＼失礼します／＼」

マズイ…非常に緊張するな…

「お部屋…綺麗だね／＼」

「そ、そうですね？あ、ありがとうございます／＼」

「……………」

「……………」

何か…気まずい…そう思っていると楓ちゃんが顔を赤くして

「は、早くベッドに入りましょう／＼」

「う、うん／＼分かった」

楓ちゃんにそう言われてベッドの中に入ると、隣に楓ちゃんも入っ  
て来た

「えへへ／＼光麻君の顔がこんなに近くにあります／＼」

「か、楓ちゃん／＼」

そんな事を近くで言われると…は、恥ずかしいですね／＼

「せ、狭くない？／＼暑苦しく無い？／＼」

「いえ／＼全然暑苦しくありません／＼」

「そ、そう？／＼」

な、なら良かった。僕がホツとしていると、楓ちゃんが真剣な顔をしていた

「…私ですね」

「ん？」

「光麻君に感謝しています…」

「僕に？」

「はい…光麻君がこの島に引っ越して来たとき、挨拶に来てくれましたよね？」

「行ったね」

「その時ですね…私は正直仲良くする気はあまりありませんでした…」

「……………」

「光麻君が来る前から居た稟君ですらお友達になる気はありませんでした…」

「でも…光麻君が私に優しく言葉をかけてくれた時…凄く嬉しかったです」

「楓ちゃん…」

「そして…今では稟君とも…悠菜ちゃんともお友達になれました…」

「光麻君…これからも仲良くしてくれますか？」

「当たり前だろ？皆との繋がりは…絶対に壊したくないからね」

「ふふ…ふわあ」

「そろそろ寝る？」

「はい…………光麻君とお話していたら…眠くなっちゃいました…」

「じゃあ僕も寝ようかな…おやすみ楓ちゃん…」

「おやすみなさい…光麻君…」

「（楓ちゃんがそんな風に思っていたなんてね…………しかし…何だろう…さっきから感じるこの胸騒ぎは…………気のせいかな…寝よう…）」

この時…僕は知らなかった…感じた胸騒ぎが…悪夢に繋がる事を  
…

## 第十七話（悪夢のカウントダウン）（後書き）

もうそろそろで少年編は終了かな…

ちなみに、何のゲームをやっていたかというところ、ゲームキューブのマリオパーティ5です。友達と50ターンやったのを思い出しました……ああ、辛かったな……



**第十八話（悪魔のカウントダウン2）（前書き）**

いやーやっと更新出来ました

今回は…多分シリアスかな？

少し文章を変えました

## 第十八話（悪魔のカウントダウン2）

（次の日の朝）

チュンチュン

「ん…ふわあ…もう朝か…」

スズメが鳴く声を聞いて目を覚ましました

「今は朝の7時か……楓ちゃんは…まだ寝てるか…」

横を見ると、楓ちゃんが可愛らしい寝顔して眠っていました…

「こつこついう時、ほっぺたとかつついてみたくなるよね……よし」

ツンツン

「んう……」

「わあ…楓ちゃんのほっぺたって柔らかいな」

ツンツンツン

「ん…ふわあ…」

マズイ！楓ちゃんが起きちゃった！

「…あ、おはようございます…光麻君…」

「う、うん。おはよう楓ちゃん…（ほっ…楓ちゃんは気付いてないみたいで良かった…）」

「?どうかしましたか?」

「い、いや何でもないよ」

「そうですか?」

「そうそう!あ、早く朝ごはん作らなきゃ!」

「あ…なら、私もお手伝いします!」

「助かるよ…じゃあ僕着替える為にリビングに行ってるよ」

「あ／＼はい分かりました／＼」

楓ちゃんが返事をしたのを聞くと、僕は着替えを持ってリビングへ向かった…

「あ、楓ちゃん味噌取って」

「あ、はい」

「ありがとう…魚の様子は?」

「ばっちりです」

「そうかそうか…あとは味見をして……よし！出来た！」

「上手くいきましたね！」

「うん。さてと…今は…8時か…楓ちゃん、僕は皆を起こしてくるから、楓ちゃんは出来上がった料理を皿に盛り付けといて」

「分かりました」

「さて…稟君と幹夫さんは起こしたし、今度は悠菜ちゃんを起こしに来たわけだけど…」

「zzzz…」

「普段からは予想出来ない位爆睡ですね…しかも…寝相が悪い」

布団がしわくちやになっただので、大方寝相が悪かったと予想した

「さてと…悠菜ちゃん…朝だよ」

ユサユサ

「ん…あと100光年」

「いやいや…光年は距離だから…ほら、早く起きないと朝ごはん抜

きだよ」

「朝ごはん抜き…やだ…」

「おはよう 悠菜ちゃん」

「うん…おはよう光麻君…」

「さ！顔洗ってリビングまで来てね」

「うん…分かった…」

相当眠いのかな…悠菜ちゃん…

「まあ良いか…さて、皆起こしたし、僕も行くか…」

「おーこのなめこの味噌汁上手いな！」

「そうかそうか そりゃ良かった」

「もしかして、光麻君が作ったの？凄いね」

「いやいや、楓ちゃんと一緒に作ったんだよ ね？楓ちゃん」

「は、はい／＼／」

「二人共凄いじゃないか！これなら将来良い夫婦になれそうだな」

「ぶー!…ちよ、ちよつと幹夫さん／＼」

「お、お父さん／＼」

「むー楓ちゃんばかりズルいーだったら私も光麻君のお嫁さんになる!」

「ちよ、悠菜ちゃんまで／＼」

…そんな会話をしていた朝の風景でした…

時間は一気に飛んで昼過ぎ

「……作者さん…書く気無いですか？」

作「い、いえ!決して書く気が無いんじゃない…」

「じゃなくて…何ですか?」(黒笑)

作「じ、自分に文才が無いからです…って嘘です!だ、だからその手に持った杖を下ろしてください…」

「問答無用です スターライトブレイカー!」

作「ぎゃ ああああああ!…!」

「ふっ…悪は滅びたり…」(キリッ)

「おい光麻…今誰かの悲鳴が聞こえたんだが…」

「気のせいだよ稟君。ほら、早くかくれんぼの続きしよう？」

「あ、ああ。分かった…」

「ハア…ハア…ハア…」

「って楓ちゃん？何か顔が真っ赤じゃない？」

「だ、大丈夫です…ハア…ハア…あ…」

「バタッ！」

「か、楓ちゃん!？」

楓ちゃんが倒れたので、おでこに手を当ててみる事に

「っ！凄い熱だ！悠菜ちゃん！稟君！幹夫さんに知らせてきて！」

「お前はどうするんだ!！」

「僕は楓ちゃんを運んでく!…だからお願い」

「分かった!稟君!行くよ!」

「お、おう!」

二人は猛ダツシユで家まで走って行った

「よし…僕も行かなきゃ…楓ちゃん、ちょっとごめんよ…」

僕は、楓ちゃんを俗に言うお姫さまだっここで抱えて全速力で家まで走った…

「39.5か…」

家に戻り、幹夫さんが楓ちゃんの熱を計ってみると、凄い高熱だった…

「どうします？今は夜ですし、病院もやってないかと…」

「うむ…仕方がない、紅葉に連絡して帰って来て貰おう…」

「それが懸命ですね…」

今、楓ちゃんはベッドで苦しそうに眠っている…くそ…僕に力があれば…くそ！

「ああ、もしもし？紅葉か？大変なんだ！楓が高熱を出して倒れちゃったんだ！」

「ほ、本当！？」



「ああ、だから帰って来てくれないか？折角の旅だけど…」

「分かったわ。今から帰ります！え？…分かりました…」

「お、おい紅葉？」

「ああすみません。どうやら皆さんも一緒に帰るそうです」「そ、  
そうか。」

「じゃあタクシーに乗りますのでそれじゃ」

ガチャ…

「幹夫さん！楓ちゃんのお母さんは帰って来るんですか！？」

「稟君か…ああ、皆帰って来るって言ってたぞ」

「そ、そうですか…ほっ」

「ところで光麻君は？」

「今楓の看病をしています…」

「そうか…」

「楓ちゃん？大丈夫？」

「ハア…ハア…ハア…こ、光麻君…迷惑を…ハア…かけて…すみません…ハア…ハア…」

「迷惑なんかじゃないよ…だって楓ちゃんは、僕の大切な友達なんだ…だから、迷惑なんかじゃないよ」

「光麻君…」楓ちゃんとそう話をしていると、悠菜ちゃんが部屋に入ってきた

「光麻君！皆帰って来るって！」

「ほ、ほんと！良かった」

「うん！あとは、帰って来るまで待つだけだね！」

「う、うん…（あれ？何でだろう…嬉しい筈なのに…胸騒ぎがする…何でだろう…）」

僕は、何故か胸騒ぎがするので落ち着けなくなっていた……

第十八話（悪魔のカウントダウン）（後書き）

我等が主人公光麻君が感じた胸騒ぎとは…これから一体どうなるのか！

そういえば、もうすぐで年越しですね…いや、短いようで長かった1年でした…

こんな小説を読んでくれた心優しい人達も、体に気をつけて元気に年を越してください…それでは！また来年もよろしくお願いします！

第十九話（一つの嘘…そして終わる一つの物語）（前書き）

何とか…年明け前に少年編が終わりました

ではどうぞ…

## 第十九話（一つの嘘…そして終わる一つの物語）

それからは…家の中は無言の時が続いた…僕はずっと楓ちゃんの看病をしたり、時折楓ちゃんが目を覚ますのでお話をしたりする位でした…

ちなみに、凜君と悠菜ちゃんはぐっすり眠っています…って言うても、僕が寝かせたんですけどね…

「はあ…早く帰って来ないかな…」

不意にそう呟いてしまったその時…ある一本の電話が鳴った…幹夫さんは慌て電話に出ました…

「は、はい芙蓉ですが…え、あ、はい芙蓉紅葉の家族ですが…な！何ですって！本当ですか！？…わ、分かりました…ありがとうございます…」

幹夫さんは顔を青ざめて電話を切りました…

「み、幹夫さん…どうかしたんですか？」

僕は幹夫さんにそう聞くと、帰って来た返事は最悪の言葉だった…

「……事故にあった」

「……え？」

「……大型トラックとタクシーの接触事故…更に後ろから追いかけて…」

てたタクシーも衝突した……」

「その二台のタクシーに乗って居たのは…光麻君の両親に稟君の両親…そして…紅葉だ…」

「っ!?!?……」

「病院に搬送され…医者は出来る限りの治療をしたそうだ……でも…意識は戻らず…先ほど亡くなった…」

「……う、嘘ですよね?」

震える声でそう聞かされたが、幹夫さんは何も答えなかった…

「……何で…神様は僕から大切な物を全て取り上げていくんだらう…不公平だよ……」

「光麻君……」

「幹夫さん…僕はもう寝ます…楓ちゃんの看病をよろしく願います…」

「……分かった」

僕は、フラフラとした足取りで空き部屋まで向かった…

「すまない…光麻君…」

ボタン

「何でなんだよ……グスツ……」

……その日の夜……僕は泣けるだけ泣いた……

次の日の朝

「……もう……朝か」

窓を見ると、日の光が差し込んでいた

「……ふう……いつまでも泣いていられないな……よし！」

僕は気合いを入れ直しますが……本当は……辛いです……辛すぎて……生きる希望を無くしてしまいです……でも……それをお父さんやお母さんが知ったらどうなるか……当然、僕を嫌うでしょうね……しかも、お父さんあたりだと殴ってきそうだもんね……

由姫さんの時もそうだ……あの時、僕は音姫ちゃんに何て言った？……

「いつまでも立ち直れないという事は、由姫さんを悲しませるだけなんじゃないか？」

……そう言ったな……今僕が置かれてる状況は音姫ちゃんと一緒じゃないのか？

「…そうだよな…よし！今度こそ気合いが入った！」

お父さん…お母さん…僕は一生懸命頑張ります…だから、一足早く上から見ていてください…

「さてと…先に稟君と悠菜ちゃんを起こして…って、どうやら二人共知った様ですね…」

昨日から感じた胸騒ぎの正体は…この事だったんだな…

「リビングまで向かいますか…」

ガチャ

「…光麻君…」

悠菜ちゃんは僕の名前を呼び、抱きついてきた…

「悠菜ちゃん…」

「…あんまりだよ…こんなので…グスツ…」

「悠菜ちゃん…泣いても良いよ…」

僕がその言葉をかけてあげると、悠菜ちゃんは大泣きした…ちなみに、稟君も泣いていました…



「…ありがとう光麻君／＼／」

「いや…このぐらいしか出来ないけど…」

「光麻君は…居なくならないよね？」

「うん…居なくならないよ…」

「うん…うん…」

「ところで…稟君」

「な…何だ？」

「楓ちゃんにこの事…どう伝える？」

「…それは」

「私が伝えとこう…その前に…光麻君、楓に熱があるかどうか確かめに行ってくれないか？」

「分かりました…」

コンコン

ガチャ

「楓ちゃん？入るよ」

部屋に入ると、楓ちゃんは眠っていた

「よし…熱計ろう…」

楓ちゃんを起こさない様に体温計を楓ちゃんの脇に入れた

しばらくすると、ピピピツという電子音が聞こえたので、体温計を取って見てみると

「38.8 か…楓ちゃんって病弱なんだよな…」

さてと、幹夫さんに教えに行くか…僕はそつと部屋から出てった…

「38.8 か…」

「どうします？」

「病院に連れていくか…」

「そうですね…」

「今は…8時40分か…じゃあ私は楓を病院に連れていく…光麻君達はどうする？」

「僕達も…幹夫さんに付いていきますよ…」

「そうか…じゃあ、光麻君、楓を連れてきてくれないか？」

「分かりました…」

その後は、楓ちゃんを病院に連れて行きました…どうやら楓ちゃんは大事を取って入院する様です…

それから2日後…楓ちゃんの熱は引きました…が…幹夫さんが遂に…紅葉さんが亡くなった事を言った…事実を知った楓ちゃんは…壊れた…今も…変わらずに…ご飯も食べなくなった…僕達とも話をしなくなつた…

ある時、医者の方はこう言った…

「このままでは、彼女はどんどん衰弱してしまいます…」

「先生…じゃあどうすれば良いんですか！」

僕は語気を荒げて聞いた…すると医者はこう答えた

「彼女に生きる為の何かを与えて下さい」

「生きる為の何か…」

「何か希望でも構いません…そうしないと彼女は…」

「……分かりました。そろそろ暗くなってきたし今日は帰ります」

「そうですね…」

多分…幹夫さんもいろいろと考えたいんだね…

「ほら、稟君に悠菜ちゃん。光麻君も帰るよ…帰ってから考えよう」

『はい…』

……ごめん悠菜ちゃん…早速、約束を破りそうだよ…でも…不幸になる人間は…一人で十分だ…

その日の夜…僕は家を抜け出して、病院へ向かった…巡回している人にバレない様にね…

しばらくすると楓ちゃんの病室の前に着いた…静かにドアを開けて中に入った…

中に入ると、窓をずっと眺めていた楓ちゃんがこちらに振り向いた

「光麻…君？」

「やあ楓ちゃん…本当はこんな時間に来るべきじゃないけど…」

「……………」

「この間、事故があったでしょ？」

僕がそう言つと、楓ちゃんはぴくっと反応した…

「あの事故を起こしたのは…全部俺だ…（お父さん…お母ちゃん…）」  
めんね（）」

すると楓ちゃんは、驚愕の表情をしていた…

「つまり、お前の母親を殺したのも俺って訳」

「え……………嘘ですよね？」

楓ちゃんが震える声で聞いてきた…それで良い

「愉快だったぜ？無残に死んでいったときのあの顔…ほんと爆笑物  
だったぜ……………」

「……………さない」

「あ？何て？聞こえないな？」

「光麻君なんか…光麻なんか！絶対に許さない！！！」

楓ちゃんはそう言つと、近くにあつた果物ナイフを持ってこちらに接近してきた…

「よつと…」

僕はそれをひらりとかわし、病室のドアを開け、楓ちゃんに對しこつ言つた

「俺を殺したければ…恨み、そして生きる…生きていつか俺を殺しに来い…」

僕はそう言つてドアを閉めた…

何とか病院を抜け出した僕は、これからどうするか迷っていた…

「どうするかな…とりあえず、幹夫さんに連絡しておこつ…」

僕は携帯を取りだし、幹夫さんに連絡した…連絡内容は…楓ちゃんには絶対に僕が言つた事が、嘘だと言わない様に…要は口止めだね…幹夫さんは渋々納得してくれた…

「ふう…口止めする様にしたし…適当に歩いておくか…」

…その日の夜…神族と魔族による開門が行われた…そして、一人の少年が姿を消した…



第十九話（一つの嘘…そして終わる一つの物語）（後書き）

いや〜ようやく終わりました…長かったな…少年編…

これで年明け前最後の更新になると思います…こんな小説を読んでくれてありがとうございます！

今度こそ来年もよろしくお願いします

それとレインハルトさん、前回の話では指摘して頂いてありがとうございます。



**第一話（再び廻る少年の齒車）（前書き）**

あけましておめでと〜い〜いまま

とりあえず年明け更新です

## 第一話（再び廻る少年の齒車）

……とある日の夜

一人の男が初音島に来た…

「ふう…ここに帰って来たのも8年ぶりかな…皆元気かな…」

8年前…俺はある一人の少女に一つの嘘を吐いた…少女に生きてもらう為の一つの嘘を…

「さてと、久しぶりに枯れない桜の木でも見に行きますか」

俺は、桜の木まで歩いていった…

「やっぱりこの辺は変わってないな…」

桜公園を見てみたが、あまり変わってない事が嬉しく思った

「しかし…桜の木の状態が悪くなって…今日は遅いから…一週間後あたりにやるか…」

夜遅くってなると、さくらも来そうだからな…

「明日は風見バーベナ学園に転入届けを出しに行かないとな…」

多分我が家には悠菜が居るだろうから…驚かす為に今日はホテルにでも泊まるか…

「そつと決まったら、早くホテルへ向かおうかな…」

俺はホテルへ向かう為に歩いた…そして、また一つ…物語の歯車が少しずつ廻り出す…

**第一話（再び廻る少年の齒車）（後書き）**

とりあえず今回はここまでですね

感想等ありましたら、よろしく願いします

主人公設定（帰還時）（前書き）

書き溜めておいたものです

とりあえずどっぞぞ

## 主人公設定（帰還時）

名前：神崎かみさき 光麻ひろま

年齢：15歳

身長：義之より少しだけ小さい 体重48kg

性別：男

髪色：黒

見た目：完全に女の子の顔になった（つまり男の娘）。目がオッドアイ（右目が青で、左目が赤）

性格：お人好しで、困っている人を放っておけない

魔力ランク：D（SSS）基本魔力は抑えている為、ランクはD

義之、朝倉姉妹、凜、楓、桜とは幼なじみ。

シア、ネリネ、神王、魔王とは主人公が開門によって迷子になったときに世話になった。特に、ネリネと魔王には一番世話になった。

プリムラとは、研究所が襲われた時に偶々主人公がその場に居たため、主人公がプリムラを救出した。ちなみにその時点でフラグは立っている。さくらとは、桜の木の事情を知り合う仲。義之が枯れない桜から生まれた存在だと知っている。

相変わらず甘い食べ物が好き。

能力は、とある系の能力を全て使える（一方通行みたいなベクトルを操ったり、逆流したりするのは不可能） 左手に幻想殺しが備わっている為、基本、能力や、魔法は右手でしか使えない。 剣術も使える（テイルズの技のみ。 作者がテイルズしか知らないため）

イメージCV：鳥海 浩輔

主人公設定（帰還時）（後書き）

いかがですか？中二ですよねw

まあこんな感じの主人公にしていきます



第二話（再会）（前書き）

最近はネタがぽんぽん出てきます…何故だろうか？

## 第二話（再会）

チュンチュン

「ん？…もう朝か…」

昨日は意外にもすぐに寝れたな…

「さてと、今日は転入届けを出さないとな…」

転入の手続きとかは、全部ある人にやってもらったから楽だな…

「おっと…早く行かないとな」

俺はホテルのチェックアウトをして、風見バーベナ学園に向かった…

「ふう…この桜並木も変わってないな…（しかし…人の視線が気になるな…ってそれもそうか…何せ、周りが制服の生徒の中に、一人だけ私服の男がいるとなると話は別か…）」

相変わらずの桜並木に感心しつつ、考え事していると、学園にたどり着いた

「さて、学園に着いた訳だが…困ったな…職員室が分からないな…

(子供の時もこんな事あったな〜)

そう…俺は今、職員室が分からず、迷子になっています。

「(小学校の時みたいに…誰かに聞いてみようかな…お！早速人を発見!)」

どういう訳か、都合良くピンク色の髪の女の子が近くにいた

「(さつさと職員室までの道を聞こう!)あの〜」

「は、はい?何でしょうか?」

どうやら突然の事に慌ててる様子だ…何か、昔の桜ちゃんみたいだ

「えっと…職員室までの道を聞きたいんですけど…」

「え?し、職員室ですか?職員室はあっちの道を……………行くとありますよ」

「ありがとうございます!」

「困った時はお互い様だよ 君は…私服って事は転校生さん?」

「あ、はい。そうですね…でも、職員室で転入届けを出した後で編入試験があるんですけどね…」

「この試験って結構難しいよ?」

「本当ですか?まあ、出来るだけの勉強はしましたから大丈夫です

「ニッコ」

「／＼／＼、そう？じゃあ私も自分の教室行かなきゃ…試験頑張  
ってね」

「ありがとうございます…さて、じゃあ行きますか」

俺は職員室に向かう為、足を進めた…

「ニッコか…よし」

コンコン

ガラッ（ドアを開ける音）

「失礼します…」

職員室に入ると、数名の先生がこちらをチラッと見た

「えっと、今日転入届けを出しに来た者ですが…」

俺がそう言つと、一人の男の先生がこちらに来た

「やあ君か。今日試験を受けるという子は」

「はい、そうです。」

「すまん…今担当の先生が手を離してるんだ…」

「じゃあその担当の先生はどこにいらっしやいますか？」

「多分…保健室に居るだろう…悪いが、保健室まで行って来てくれないか？転入届けもついでに出してくれ」

「分かりました。あの、保健室はどちらに…」

「保健室は………にありますよ。」

「ありがとうございます。では、失礼しました」

ガラガラ

ボタン

「ふう…緊張した〜さてと、今度は保健室か…何だか面倒だな〜」

と、少し文句を言いつつ保健室へ向かい歩いていった…

「今度こそ…」

コンコン

ガラッ

「失礼します」

中に入ると、髪が青緑？つばい眼鏡をつけた女の先生が居た…何か大人の女性って感じがするな

「あら？私服の外部者って事は…貴方が今度の転入生ね…丁度良かったわ、じゃあ付いてきて」

「あ、はい。」

「ここで試験をやってもらっからね」

着いたところは空き教室？だった

「はい、分かりました」

「時間は今から90分間…時間内に終わったら声を掛けてちょうだい」

「分かりました」

「じゃあ…始め」

何かやる気が無い開始の合図が出された。俺は気にせず一目散に問題に取り込んだ…

「……………」

あの女の子が難しいとは言ってたが…

「（簡単すぎる…）」

まだ試験が始まって30分しか経ってないが…

「……………」

「ん？どうした？分からないから教えてほしいか？」

「いえ…そういう訳じゃなくて、終わりました」

「……………」

「はい。この通り」

俺は全ての解答欄が埋まった答案用紙を先生に渡した

「うわ…凄いわね…まだ30分しか経ってないのにね…」

「そうですね？てか、先生のその書類の山の方が辛いと思いますけど…」

「ああ…この間へマしちゃってね…始末書を書かされてるのよ」

「あ、そこ間違ってますよ」

「え？どっ？」

「ほら、ここ…」

「ありがとうございます おかげで助かったよ」

「いえいえ礼には及びません」

あれから余った試験時間を使い、一先ず書類の半分は終わった…

「しかし…疲れたな」

「試験だったのに、始末書まで手伝わせてごめんね…ほら、これはお礼だ」



先生はそう言って、どこからか5000円札を出した……って

「いやいや、お金はさすがに……」

「いや、書類を手伝って貰うだけで大助かりなんだ。だからもらってくれ」

「は、はあ……分かりました」

「よし 試験の結果は明日分かると思うが、まあ満点だろう」

「あはは……」

俺は……苦笑いしか出来なかった

「おっと……名前を言って無かったな……私の名前は水越舞夏だ。よろしくね」

「は、はあ……じゃあ知ってると思いますが、俺も言っておきますね。俺の名前は神崎光麻です。これからよろしくお願いします」

「神崎光麻君か……よろしくね……では……私はテストの採点をしないといけないから……悪いけど、転入届け学園長に出してきてくれない？」

「ええ……分かりました」

「ふふ すまないな。では頼んだ……っと、学園長がいる部屋は……だからな」

「分かりました」

先生はその場を去っていった…さてと

「学園長が居るといふ部屋に行きますか…」

「周りのクラスが授業中で良かった…」

廊下を歩いているときに授業中だった為、特に目立たずにすんだ

「さて…ここか」

何か今日はいろいろと歩き回ってる気がするな…

「よし…」

コンコン

ノックをすると、中から「どうぞ〜」っていつ何故か聞いた事のある声が聞こえた…まさかな

「失礼します…」

「……………え？」

なんと…中に居たのはさくらだった…

「…光麻君？」

「よ、ようさくら…ってゴハッ！」

挨拶をしたら、さくらに抱きつかれた…もといタックルをされた…

「いつて…」

「どうして急に居なくなったの…」

「い、いや…それはなちよっとした事情があつてな…」

「私は…ずっと…」

その時、俺はさくらが震えていることに気がついた…

「さくら…ごめんな…」

俺に出来ること…それはさくらを慰める事しか無かった

「寂しかった…もう…ずっと会えないかと思った…」

「ああ…」

「突然居なくなつて…皆心配してた…」

「ああ…」

俺は優しくさくらの頭を撫でた…

「でも…こうしてまた帰って来てくれた…もう…居なくならないよね？」

「ああ…ずっとこの島にいる…」

「グス…うん、分かった…約束だよ？」

「ああ…約束する」

「うん…うん…」

さくらは、自分で涙を拭いて笑顔でこう言った…

「おかえり！光麻君！」

「うん…ただいま…さくら」

俺は…さくらと再会を果たした…

## 第二話（再会）（後書き）

いや〜さくらとの再会と、あのキャラ達と接触しましたw

感想等ありましたらよろしくお願いします

第三話（再会2）（前書き）

やっと更新です

びびびびびび...

### 第三話（再会2）

「ところで、さくらは知らなかったのか？俺がこの学園に転入するって事は」

「うん、全然知らなかったよ。転入生が来るっていうのは知ってたんだけどね」

さくらが苦笑いをしつつそう言った…

「（魔王…何で貴方は肝心な事を言わなかったんだ…）」

俺が心の中で心底呆れていると、さくらが

「ところで、光麻君はこの後どうするの？」

「え？どうするって…学園から出て昼ご飯を食べて適当に散歩したらホテルに帰るつもりだけど…」

「にゃ！？ホ、ホテル！？光麻君、ホテルに泊まってるの！？？」

「あ、ああ…そうだけど」

「ホテルなんて高いよ！だったら家に来なよ！」

「さくらの家か？まあこうしてまた出会えたんだし…別に良いけど」

「ちなみに、義之君も居るからね」

「…………え？」

今さくらは何と言った？…義之も居る？

「お…おい…さくら、それは本当か？」

「本当だよ…何かね…お兄ちゃんが、「そろそろつら若き男女が同じ屋根の下で暮らすのはまずいだろ」って言ったから義之君が私の家に移ったんだよ」

「純一さんが…まあ良いか。義之が居たって」

「決まりだね」

さくらはそう言つと、急に抱きついてきた

「さ、さくら！？」

「えへへ／＼／＼気にしない気にしない／＼／＼」

「（さくらはそう言つが…何か女の子特有の良い匂いが…／＼／＼）」

何て考えていると

コンコン

ドアがノックされた…するとさくらは俺から離れて

「どろどろ〜」

と言つた…面倒な事にならずに済んだな…



「失礼します。学園長、これ転入生の試験の結果です…」

入って来たのは、水越先生だった…しかも、手に持ってるのは答案用紙だった

「どれどれ…おお！光麻君凄いね！満点だなんて」

「私も驚きました…しかも30分で終わらせてしまっんですからね」

「（いや…これ簡単だったし…）」

「そういう訳で、転入生の試験は合格って事で」

「良かったね 光麻君」

「じゃあ私は仕事があるのでこれで…」

「うん ありがとう舞夏ちゃん」

水越先生はそう言って部屋から出ていった

「さてと、じゃあ家に行こうか」

「学園長の仕事は良いのか？」

「気にしない さ、行こ」

「大丈夫なら良いが…」

「うんうん」

俺とさくらは、家に向かった…

「まあ相変わらず変わらない家だな」

「当たり前でしょ」じゃあ中に入って

「ああ、お邪魔します」

中に入ってみると、なかなかの和風って感じの家だった

「よく考えたら俺、さくらの家に入るのって初めてだよな？」

「そうだね じゃあ記念にお昼ご飯作ってよ」

「昼ごはんが記念って…はは、よし！手によりを掛けて昼ごはんを作るか」

「本当？やったあ」

「じゃあさくらも皿とか出すの手伝ってくれ」

「は〜い」

「ふふ さくらって何か可愛いな」

「え？／＼／＼、そうかな？／＼／」

「おう 自信を持って言えるぞ 例え年がピーピー歳でもな」

「にゃ！な、何で知ってるの！」

「秘密だよ」

な〜んて会話をしつつ、昼ごはんを作っていた…

時間は変わり、夕日が見えてきた…ちなみに、昼ごはんはパスタを作ってみた。さくらからは味は大絶賛だったみたいで、今度から作っていこうかな〜って思った…

「さくら〜洗濯物畳んどいたぞ〜」

「ありがとう 光麻君」

「しかし、義之はいつ帰って来るんだ？」

時刻は午後5時過ぎ。今の季節は春だからそこまで暗くは無いけど…

「まあ心配し過ぎか…」

「そつだよ」

「義之が帰って来て俺を見たら…どんな感じになるかな?」

「多分びっくりすると思うよ。あと、晩御飯は音姫ちゃんと由夢ちゃんが来ると思うから、もっと騒がしくなるね」

「……聞いてないぞ、そんな事」

「あれ?言つて無かつたっけ?」

「言つて無いぞ……まあ良いか」

「そつそつ 細かい事は気にしちや駄目だよ」

そんなこんなで、義之が帰って来るまで、さくらと話していた…

そして…時は来た

「ただいま」

という義之の声が聞こえた…俺はとある人の様に段ボールを使って

隠れた…まあ見ていたさくらが苦笑いしていたがな

ガラッ

「あれ？さくらさん？もう帰って来たんですか？」

「うん いつもより早く仕事が終わったからね」

「そうですか…ところでさくらさん、この段ボールは一体何ですか？」

「さあ？僕分かんないから義之君開けてよ」

「は、はあ…分かりました…あれ？何でこの段ボール逆さに置いてあるんだ？」

義之はそう言って段ボールに手を掛けてきた…そして…

「よっど………」

「………やあ」

義之がこちらをずっと見てきたので、挨拶を試みた

「こ、光麻！？お前、い、いつ帰って来たんだ!？」

「お、落ち着けよ義之」

「あ、ああ…ごめん」

「ええとね…俺がこの島に帰って来たのは昨日からだよ」

「昨日!?!」

「だから声が大きいって」

「す、すまん…しかし、昨日からか…じゃあ今日は何してたんだ?」

「今日は風見バーベナ学園に転入届け出しに行くのと、試験を受けてた」

「なるほど…で、試験は大丈夫だったか?結構難しいと思うけど」

「あんなの簡単だったよ」

「か、簡単!?!…マジかよ」

「????」

義之が何で驚いているのか分からないけど…

「じ、じゃあ今まで何処に行ってたんだ?」

「僕も聞きたい」

今までずっと黙っていたさくらがそう言った

「ええと…神界と魔界に行ってたね」

「何で?」

「普通に夜歩いてたら急に何かに吸い込まれる感じで飛ばされたって感じかな」

「開門の時からまあ仕方がないね」

さくらがうんうんと頷いて話に結論を付けたその時、玄関の戸が開く音が聞こえた

「ああ、お腹すいた」

「弟君、ご飯作りに来たよ」

この声は…音姫と由夢か！

「（二人共近づいてくる！！）ま、マズイ…もう一度段ボールに隠れよう…」

俺は居間の隅に置いてあった段ボールにまた隠れた…相変わらず義之とさくらは苦笑いをしていたがな

ガラッ

「あ、さくらさんも帰ってたんですね」

「今日は仕事が早く終わったからね」

「じゃあすぐに準備しますね 弟君、一緒に手伝ってね」

「あ、ああ。分かった音姉」

そう言って、義之と音姫はキッチンへ向かった…一方、由夢はじつとこちらの段ボールを見ていた

「ジ〜…ねえさくらさん、この段ボール箱は何ですか？」

「さあ？僕は知らないけど…由夢ちゃん、代わりに開けてくれないかな？」

「ええ〜私ですか？まあ、さくらさんがそう言うなら…」

あれ？ナニコノデジャブは？

「でも…何でこの段ボール箱逆さに置いてあるんだろう…」

義之の時と同じように、由夢が段ボールに手を掛けてきた…ああ、オワタ

「よいしょ…」

「……………やあ」

由夢がじつと見ていたので、俺は義之の時と同じように言葉をかけた

「…う、嘘…も、もしかして光兄？」

「あ、ああ…そうだけど…ってグハッ！」

返事をする、由夢は抱きついてきた…ってかタツクルに近いなこれ…



「っ！……良かった…帰って来てくれて…良かった…」

と、由夢は震えながら小さい声で呟いていた…

「…由夢…」

俺はさくらの時と同じ、頭を優しく撫でた…すると

「ど、どうしたの！由夢ちゃ……」

突然の物音に心配になったのか、音姫もこちらに来た…

「……光君？」

「そ、そうだよ」

ま、まさかこれは…

「っ！光君！」

「グハツ！！」

音姫も由夢やさくらと同じ様に抱きついてきた…ちなみに、由夢は俺の右腕に抱きついていてる状態です

「グスツ…いきなり居なくなつて…心配したんだよ？」

音姫も泣いていた…

「…ごめんな…これからはずっとここに居るからな」

この言葉に、由夢が反応して

「本当に？」

と、聞いてきた…俺は迷わず

「ああ…本当だ」

と、返事をした…

「ん、ん！…話は纏まったかな？」

さくらは、咳払いをしてそう聞いてきた…

「光兄には、いろいろと言いたい事もありますが…」

「まずは…この言葉が先だよね？」

「うん！そうだね」

「じゃあ、皆？改めて…」

『おかえり！光麻！！（光兄、光君、光麻君）』

涙が出そうだった…あれから8年たったけど…俺の居場所はまだまだあったんだ…

「ああ…ただいま！」（ニコッ）

俺は笑顔でそう言った……

第三話（再会2）（後書き）

うん、やっとここまで書いたって感じですね！

感想等ありましたらよろしく願います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9557x/>

---

SHUFFLE! ~ 帰って来た少年 ~

2012年1月6日02時47分発行